岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 132

段林遺跡・段林古墳

県道矢掛寄島線改良事業に伴う発掘調査

1998

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 132

段林遺跡・段林古墳

県道矢掛寄島線改良事業に伴う発掘調査

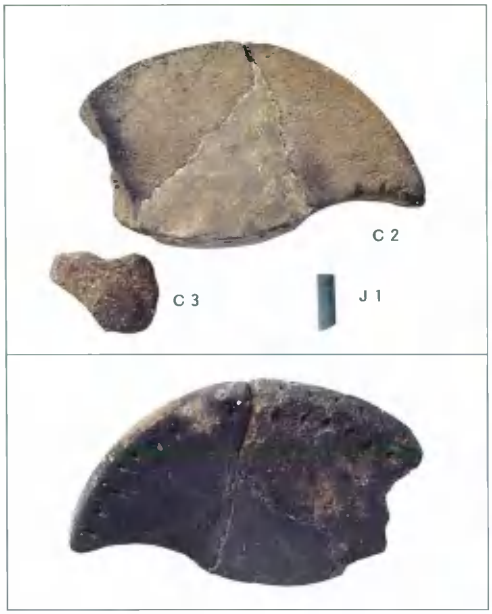
1998

岡山県教育委員会

1．段林古墳石室内遺物出土状況（西から）

2．竪穴住居全景（西から）

巻頭図版 2



1．弥生時代主要遺物（1／2）

2．石室内遺物出土状況（西から）

3．古墳出土主要金属器（1／2）

序

本報告書には、浅口郡鴨方町地頭上に所在する、段林遺跡・段林古墳の発掘調査結果を収載しました。

この調査は、県道矢掛寄島線の改良事業に伴う発掘調査であります。県道矢掛寄島線は、県南西部の矢掛町と寄島町を結ぶ主要地方道の一つです。岡山県内における人的・物的移動の活性化のため、県道の改良事業を行っています。このうち矢掛寄島線は、浅口郡鴨方町遙照山麓付近での幅員が狭く、一刻も早い改良工事が必要とされていました。

岡山県教育委員会では、この県道矢掛寄島線の改良に当たって、建設予定地内における埋蔵文化財の取り扱いについて、関係当局と協議調整を重ねてきました。その結果、工事にかかる部分について、やむなく記録保存のための発掘調査を行うことになり、平成８年度に一次調査を、引き続いて平成９年度に全面調査を実施いたしました。

平成８年度の一次調査では、岡山県遺跡台帳に記載されている塚地遺跡周辺６カ所にトレンチを入れ、そのうち２カ所で遺構を検出しました。本遺跡が所在する箇所のトレンチでは、古墳時代後期の古墳１基と、弥生時代の遺構などを確認しました。平成９年度の調査の結果、古墳の内部主体である横穴式石室はかなり破損していたものの副葬品の残りはよく、土師器・須恵器や鉄鏃・農工具などの鉄製品が多数出土しました。鴨方町での古墳の調査は今回を含めて４例目ですが、最も豊富に副葬品が出土した例になります。また弥生時代では、竪穴住居が検出されたほか、分銅形土製品が２個体出土しました。分銅形土製品の発見は町内初の例になります。

この報告書が学術研究に寄与できるばかりか、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史研究のための資料として広く役立つならば幸いと存じます。

発掘調査および報告書の作成に当たっては、岡山県文化財保護審議会委員の先生方をはじめ、井笠地方振興局、鴨方町教育委員会ならびに関係各位から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　籔　本　克　之

例　言

1．本書は、岡山県教育委員会が、浅口郡鴨方町地頭上における県道矢掛寄島線改良事業に伴い、井笠地方振興局の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成８・９年度に発掘調査を実施した、段林遺跡・段林古墳の発掘調査報告書である。

2．段林遺跡・段林古墳は浅口郡鴨方町地頭上1418－５に所在する。

3．発掘調査は、一次調査を江見正己が平成８年７月16日～８月２日の期間担当し、全面調査を内藤善史・小林利晴が平成９年７月８日～９月11日の期間担当した。

4．発掘調査に当たっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康両先生から御指導・御助言をいただいた。

5．報告書の作成および遺物整理は、平成９年９月30日まで内藤・小林が、10月１日以降小林が岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）において行った。

6．本文の執筆は、内藤・小林が分担して行い、第２章を内藤が、その他を小林が執筆した。

7．本書の編集は小林が担った。

8．出土遺物、実測図、写真等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）において保管してある。

凡　例

1．報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は国土座標系の座標北を示す。

2．本報告書記載の各遺構・遺物実測図は、下記のとおり統一する。

　遺構　　竪穴住居・たまり１/80　土壙１/30　古墳１/100　古墳石室１/40

　遺物　　土器１/４　土製品１/２　石器１/２　金属器１/２　玉類１/２

3．遺構番号・遺物番号は、各時代ごとの連番である。

4．遺物番号は、材質を示すため、土器以外のものについては下記の略号を番号の前に付した。

　土製品：C　石器：S　金属器：M　玉類：J

5．土器実測図中で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のための口径復元に不確実性があるものを示す。

6．遺物名については、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などを壺、甕、高杯のように省略して用いる。

7．報告書中に用いる時代区分は、弥生時代については『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』で通常使われている概念による。古墳時代については、１世紀を４分割して表現する。

8．第２図は、建設省国土地理院発行の５万分の１地形図（玉島）複製し、加筆したものである。

本文目次

序
例言
凡例
目次
第１章　地理的･歴史的環境 …… 1
第２章　発掘調査の経緯と経過 …… 3
　第１節　発掘調査にいたる経緯 …… 3
　第２節　発掘調査の経過 …… 3
第３章　段林遺跡･段林古墳の調査 …… 5
　第１節　調査の概要 …… 5
　第２節　弥生時代の遺構･遺物 …… 9
　第３節　段林古墳の調査 …… 20
第４章　まとめ …… 29

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　周辺の遺跡分布図（１/50,000） …… 2
第３図　調査区位置図 …… 5
第４図　遺構配置図（１/200） …… 6
第５図　第１トレンチ土層断面図（１/80） …… 7
第６図　第２トレンチ土層断面図（１/80） …… 8
第７図　第３トレンチ土層断面図（１/80） …… 8
第８図　竪穴住居（１/80） …… 10
第９図　竪穴住居出土遺物 …… 11
第10図　たまり（１/80） …… 12
第11図　たまり出土遺物 …… 13
第12図　たまり出土遺物＜石器＞（１/２） …… 14
第13図　土壙－１（１/30） …… 15
第14図　炉跡－１・２（１/30） …… 15
第15図　土壙－２（１/30）･出土遺物（１/４） …… 15
第16図　土壙－３（１/30）･出土遺物（１/４） …… 16
第17図　土壙－４（１/30）･出土遺物（１/４） …… 16
第18図　古墳時代以降土砂崩れ跡出土遺物（１/４） …… 17

第19図　中世以降土砂崩れ跡出土遺物……18
第20図　調査区西側出土遺物……19
第21図　段林古墳（1/100）……20
第22図　段林古墳1トレンチ土層断面図（1/80）……21
第23図　段林古墳2トレンチ土層断面図（1/80）……21
第24図　段林古墳主体部平断面図（1/40）……22
第25図　主体部遺物出土状態（1/20）……23
第26図　段林古墳出土遺物＜須恵器・土師器＞（1/4）……24
第27図　段林古墳出土遺物＜鉄器1＞（1/2）……25
第28図　段林古墳出土遺物＜鉄器2＞（1/2）……26
第29図　段林古墳出土遺物＜鉄器3・石器＞……27

図版目次

巻頭図版1－1　段林古墳石室内遺物出土状況（西から）
2　竪穴住居全景（西から）
2－1　弥生時代主要遺物（1/2）
2　石室内遺物出土状態（西から）
3　古墳出土主要金属器（1/2）
図版1－1　土壙－3遺物出土状況（西から）
2　段林古墳全景（北西から）
3　石室内遺物出土状況（北から）
2－1　石室内鉄鏃出土状況（北西から）
2　中世以降土砂崩れ跡（北西から）
3　段林遺跡全景（北西から）
3－1　竪穴住居出土主要遺物（1/3）
3－2　たまり出土主要遺物（1/3）
3　竪穴住居出土鉄鏃（1/2）
4　たまり出土紡錘車（1/2）
5　たまり出土石器（1/3）
4－1　古墳時代以降土砂崩れ跡出土主要遺物（1/3）
2　中世土砂崩れ跡出土主要遺物（1/3）
3　土砂崩れ出土土器＜弥生以外＞（1/3）
4　調査区西側（1/3）
5　土壙－3出土遺物（1/3）
5－1　古墳出土土器（1/4）
2　古墳出土鉄製品（1/2）
3　古墳出土砥石（1/2）
6　古墳出土鉄鏃（1/2）

表図版

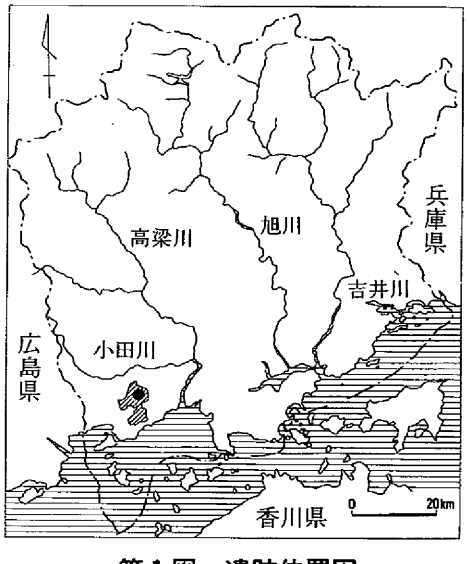
第1表　古墳出土鉄製品観察表……28

第１章　地理的・歴史的環境

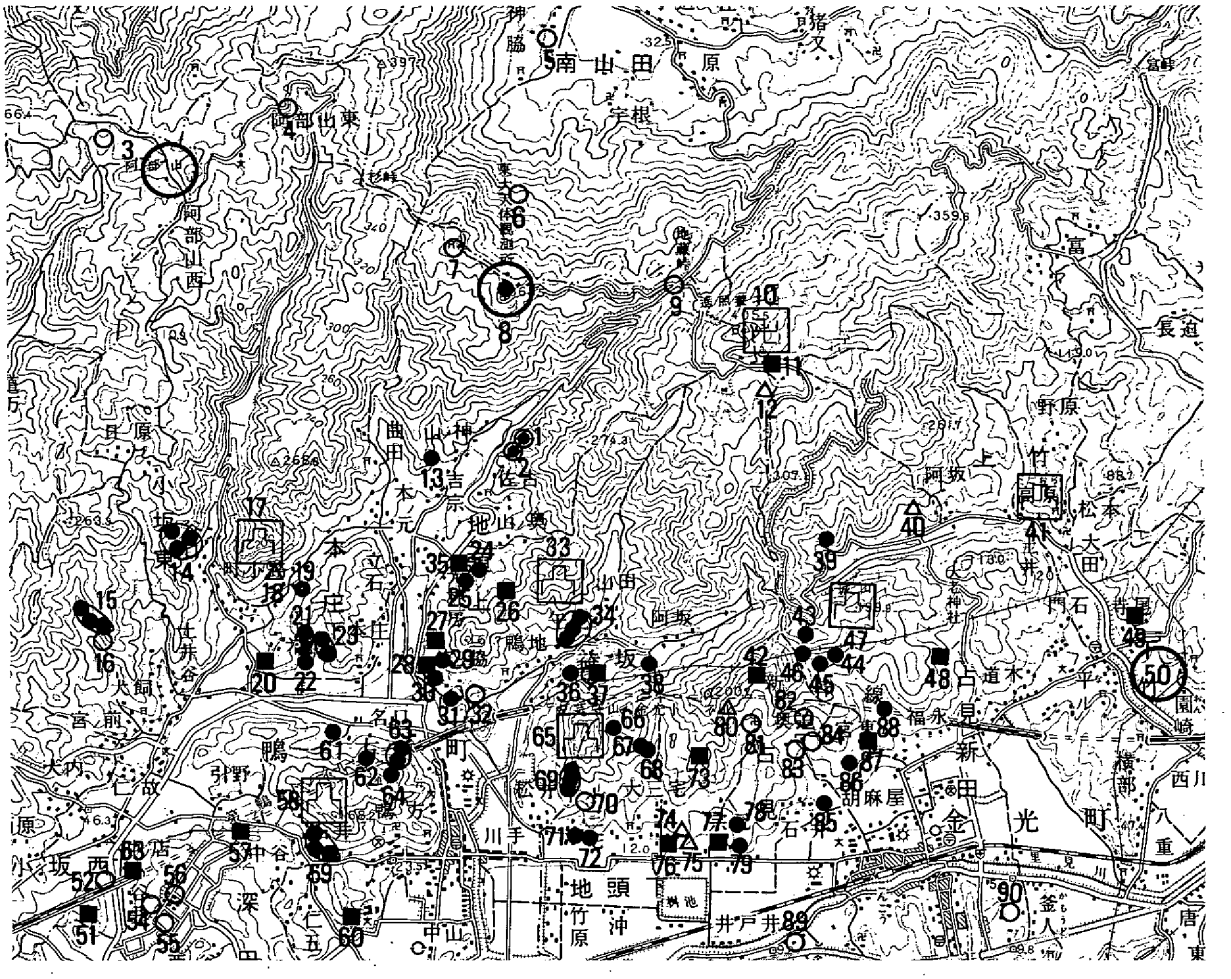
鴨方町は、県の南西部に位置する。西には笠岡市・里庄町があり、東は金光町、南は寄島町と接する。また北側は、阿部山・竹林寺山・遙照山など 400ｍ級の山塊によって小田川水系の矢掛町と分かれている。鴨方町の水系はこれらの山塊から阿坂川、本庄川、曲田川、杉谷川などが発し、鴨方川となって合流し、南流する。

鴨方町には、特に現在の鴨方インター周辺の本庄や地頭上、竜王山の北側に位置する六条院などで弥生土器の発見や古墳が見つけられてきた。また阿部山・竹林寺山・遙照山などの山塊周辺では、弥生中期の土器片などが多数発見されている。今回調査した段林遺跡は、これら山塊の中腹に位置し、やはり弥生中期の土器が多数出土している。

鴨方町の遺跡は、古くは旧石器時代から存在する。和田遺跡の発掘調査では、旧石器時代後期の槍先形石器が出土している。縄文時代の資料は、和田遺跡で石器が出土し、向原遺跡では後期の深鉢が出土する。また小坂東の土井谷でも後期の土器片が採集されている。今回の調査でも、わずか１点ではあるが後期の深鉢が出土している。近隣の市町村の状況から考えても、町内に後期の遺跡が存在したことは確実である。弥生時代の遺跡は、小坂東の犬飼本谷遺跡で前期の壺棺が発見され、奥ノ原山・中四条原・赤鉢山・阿部山・天文博物館・竹林寺山などで中・Ⅲ期の土器片などが発見されている。和田遺跡では調査により、後期の土壙と終末期の土壙墓が検出される。土壙墓からは特殊器台形土器も出土した。町内では山塊部に弥生中期の遺跡があり、平地部に後期・終末期の遺跡が存在することになるが、その中間に位置する今回の調査区で中期と後期の２つの時期が確認されたことは興味深い。また今回の調査では、後期の竪穴住居が発見された。古墳時代になるとさらに遺跡数は増える。４～５世紀代の古墳では、箱式石棺を内部主体にもつ古墳が多数発見されている。この内宇月向山１号墳は、箱式石棺の中から人骨２体、鉄製の剣、鉇、鎌などが出土する。横穴式石室を内部主体にもつ後期古墳は、さらにその数を増し、町内各地に分布する。大半の古墳は、平地部を見下ろすことの出来る丘陵部か中腹部に位置する。しかし発掘調査例は、宮の脇古墳と阿坂古墳、片山古墳の３例にとどまる。宮の脇古墳は６世紀後半から７世紀代の古墳で、須恵器・大刀・銅釧・銀製耳環・ガラス玉などが出土した。阿坂古墳は７世紀初頭から中葉の古墳で、須恵器・鉄鏃・耳環などが出土した。今回調査された段林古墳は、町内で調査された４例目の古墳である。また本遺跡に近い塚地遺跡のすぐ脇では、やはり横穴式石室を内部主体にもつ古墳が確認されている。鴨方町では、他にも窯跡や中世の山城跡が多数発見されている。しかし町内で発掘調査が行われた例は、山陽自動車道建設に伴う和田遺跡など一連の調査と、1991年と1995年に行われた内平遺跡の確認調査、片山古墳の調査だけである。どの遺跡もどちらかというと平地部に位置する遺跡であり、中腹とはいえ山間部で発掘調査が行われるのは今回が初めてである。山塊部と平地部の関係を考える上で貴重な資料になろう。和田遺跡周



第１図　遺跡位置図



1.段林遺跡・古墳　2.塚地遺跡・古墳　3.阿部山北山遺跡　4.阿部山遺跡　5.(散布地)　6.竹林寺・地蔵岩遺跡　7.竹林寺遺跡
8.竹林寺天文台遺跡　9.地蔵峠遺跡　10.遙照山廃寺　11.(散布地)　12.遙照山瓦窯跡　13.坪古墳　14.杉谷古墳群　15.犬飼本谷古墳群
16.犬飼本谷遺跡　17.杉山城跡　18.宇月原窯跡　19.宇月原塚　20.米遺跡　21.向山古墳群　22.向山霊櫃墓　23.奥迫古墳群　24.地頭上八幡塚
25.光林房古墳　26.樋路遺跡　27.光林房遺跡　28.日吉遺跡　29.日吉神社古墳　30.日吉塚　31.宮の脇古墳　32.和田遺跡　33.西知山城跡
34.片山古墳群　35.八幡五輪塔　36.向原古墳　37.向原遺跡　38.阿坂古墳　39.大石古墳　40.阿坂窯跡　41.(城跡)　42.(中世墳墓)
43.加賀谷１号墳　44.加賀谷２号墳　45.加賀谷３号墳　46.加賀谷４号墳　47.城山城跡　48.(散布地)　49.寺尾貝塚　50.東郷遺跡　51.和部遺跡
52.小坂遺跡　53.沖の店遺跡　54.谷井遺跡　55.内平荒神遺跡　56.内平遺跡　57.引野中世墓地　58.鴨山城跡　59.石井古墳群　60.宮尾遺跡
61.上名口荒神塚　62.上名口古墳群　63.下名口古墳群　64.鴨山石鎚塚　65.安芸守山城跡　66.開古墳　67.朝鮮谷古墳１号　68.朝鮮谷古墳２号
69.安芸守山西南麓古墳群　70.小三宅遺跡　71.小三宅古墳１号　72.小三宅古墳２号　73.(散布地)　74.山崎窯跡１号　75.山崎窯跡２号
76.占見廃寺　77.(散布地)　78.丸山古墳　79.(古墳)　80.西谷窯跡　81.(散布地)　82.(散布地)　83.奥迫西遺跡　84.奥迫遺跡
85.厄神塚古墳　86.(古墳)　87.(散布地)　88.加賀谷古墳５号　89.小西原貝塚　90.(散布地)

○ 弥生　● 古墳　△ 窯跡　■ 古墳以降　□ 城跡・寺院跡

第２図　周辺の遺跡分布図（１/50,000）

辺などの平地部でも、遺跡数のわりに拠点となるような集落は発見されていない。今後発掘調査が増加すれば、確実に集落址の発見例が増加するものと思われる。　（小林）

引用参考文献

伊藤晃ほか「浅口郡鴨方町内の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42　岡山県教育委員会　1981年

平井勝「鴨方町片山古墳群の発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10　1980年

『鴨方町史』本編　鴨方町史編纂委員会　1990年

桑田俊明「内平遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』22　1992年

柴田英樹「内平遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』26　1996年

第２章　発掘調査の経緯と経過

第１節　発掘調査にいたる経緯

県道矢掛寄島線は、県南西部の小田郡矢掛町から浅口郡鴨方町を経て浅口郡寄島町に至る主要地方道である。この内、矢掛町と鴨方町の境は、地蔵峠越えの細く曲がりくねった山道で結ばれており、交通の難所となっている。このため平成８年度から遥照山に延長1,210ｍのトンネルを掘削し、さらに県道の改良を行う地方特定道路整備事業が着手された。

鴨方町内の県道改良部分には、遺跡の範囲などは明らかでないが、弥生時代の土器が出土しているところが含まれているため、平成８年５月30日付けで井笠地方振興局長から文化財保護法第57条の３に基づく通知が提出された。これを受けて岡山県教育庁文化課では、当該地における遺跡を確認することになり、岡山県古代吉備文化財センターに依頼し、平成８年７月16日から８月２日まで道路拡幅計画により削平される５本の尾根筋を中心に、トレンチによる一次調査を実施した。

調査の結果、段林地区から天井石など石材の一部が抜き取られた古墳が１基検出されたのをはじめ、弥生時代の竪穴住居および土壙などの遺構が確認された。また、塚地地区からは僅かながら弥生土器片が出土するとともに、丘陵頂部付近では柱穴が確認された。

岡山県教育庁文化課は、一次調査の結果を基に井笠地方振興局建設部と遺跡の取り扱いについて協議を行った。その結果、一次調査により確認された段林遺跡・段林古墳および塚地遺跡について、岡山県古代吉備文化財センターが平成９年度に発掘調査を行い、報告書を刊行することとなった。

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は、平成９年７月から調査員２名で着手したが、塚地遺跡については用地の買収交渉が整わないため、段林遺跡・段林古墳のみ実施することとなった。段林古墳の石室は、天井石をはじめ側石の多くも既に抜き取られていたが、石室内の遺存状態は良好で、須恵器・土師器の土器をはじめ武具（鉄鏃）・農工具などの副葬品が数多く出土した。段林遺跡は後世の開墾や土石流などによる削平が著しく、遺構の遺存範囲はそれほど広くなかった。なお、遺跡は古墳の下層におよんでいたため、墳丘下の遺構検出は石室石材を重機で除去後に行い、９月11日に発掘調査を終了した。

報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて９月末日まで２名が、10月から12月までは１名が専従し、平成９年度に印刷・刊行されることになった。（内藤）

調査の体制

平成８年度

岡山県教育委員会		岡山県教育庁文化課	
教育長	森崎岩之助	課長	大場　淳
教育次長	黒瀬定生	課長代理	松井英治
		参事	葛原克人

課長補佐
（埋蔵文化財係長）　平井　勝
主　　査　　若林一憲
岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　河本　清
次　　長　　高塚恵明
文化財保護参事　　正岡睦夫

総務課
課　　長　　丸尾洋幸
課長補佐（総務係長）　井戸丈二
主　　査　　木山伸一
調査第一課
課　　長　　高畑知功
第一係
課長補佐（第一係長）　江見正己（調査担当）

平成９年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　黒瀬定生
教育次長　　平岩　武
岡山県教育庁文化課
課　　長　　髙田朋香
課長代理　　西山　猛
参　　事　　葛原克人
課長補佐
（埋蔵文化財係長）　平井　勝
主　　事　　三宅美博
岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　籔本克之
次　　長　　正岡睦夫

総務課
課　　長　　小倉　昇
課長補佐（総務係長）　井戸丈二
主　　査　　木山伸一
調査第三課
課　　長　　柳瀬昭彦
第三係
課長補佐（第三係長）　下澤公明
文化財保護主幹　　内藤善史
（調査・報告書担当）
主　　事　　小林利晴
（調査・報告書担当）

日誌抄

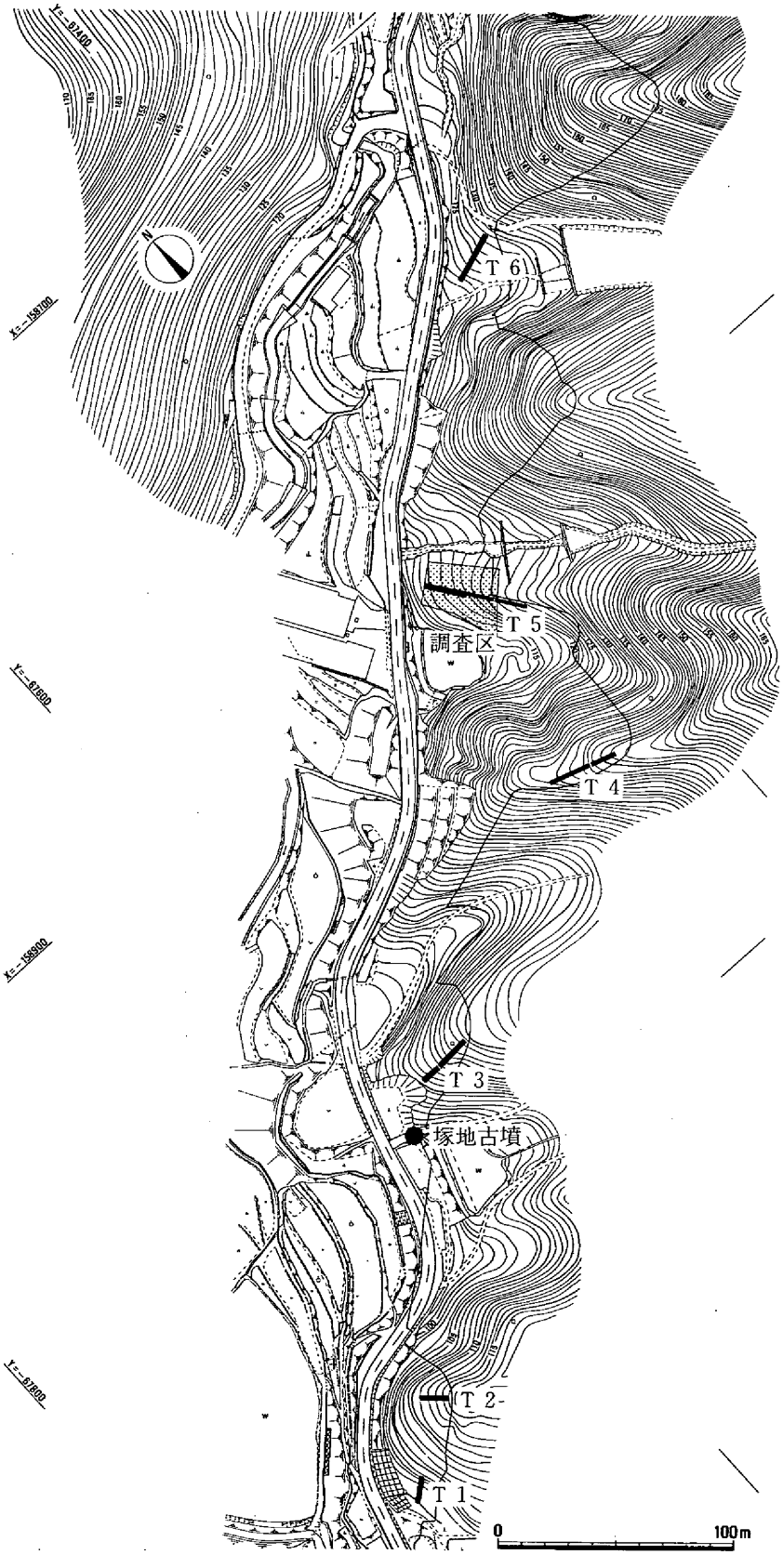
平成８年度
７月16日　発掘器材搬入、一次調査開始
８月２日　一次調査終了、発掘器材撤収
平成９年度
７月１日　発掘調査準備開始
７月８日　発掘器材搬入、発掘調査開始
７月15日　段林古墳墳丘トレンチ掘り下げ開始
７月23日　段林古墳墳丘表土剝ぎ開始
７月30日　段林古墳石室内掘り下げ開始
８月１日　段林古墳墳丘清掃、写真撮影、墳丘盛土掘り下げ開始
８月11日　段林遺跡遺構検出作業開始
８月18日　段林古墳石室実測作業開始
８月22日　段林古墳発掘調査終了
８月25日　段林遺跡重機による排土
８月26日　段林遺跡墳丘下遺構検出作業開始
９月10日　段林遺跡遺構清掃、写真撮影
９月11日　段林遺跡発掘調査終了、器材撤収
９月12日　報告書作成作業開始
12月31日　報告書作成作業終了

第３章　段林遺跡・段林古墳の調査

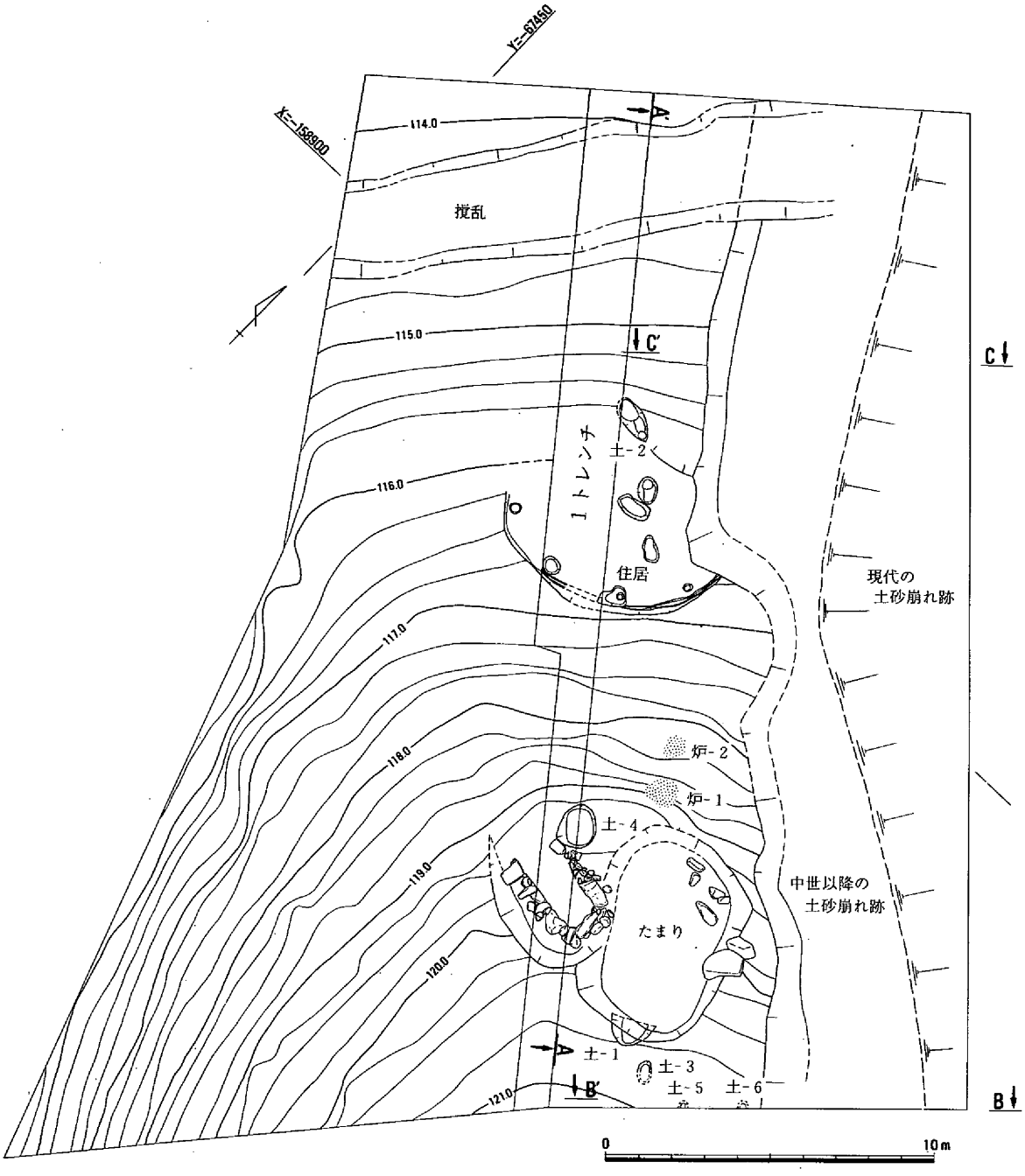
第１節　調査の概要

平成８年度の一次調査において、遺跡地図に記された塚地遺跡周辺に６カ所のトレンチを入れた（第３図）。このうち１・３・５・６トレンチの４カ所で、弥生土器・須恵器・中世土器などの遺物が出土した。３・５トレンチにおいては、遺構も検出され、３トレンチ周辺をもって塚地遺跡と名付けられた。５トレンチは遺構の密度が高く、横穴式石室を内部主体とする古墳や、弥生時代の竪穴住居・土壙などが検出された。今回調査を行った段林遺跡・段林古墳は、この５トレンチの周辺であり、一次調査で確認された古墳と弥生時代の遺構の全体像を把握することが、調査の目的である。

調査はまず５トレンチをさらに地山まで掘り下げ、これを第１トレンチと改名し、基本土層とする（第５図）。このうち５層は土砂崩れ跡である。この層は石室の盛土を破壊しており、少なくとも古墳時代以降の土砂崩れ跡であると考えられる。この層には弥生中期の遺物が多数含まれている。またこの層は、山側から谷側まで遺跡全体に伸びて

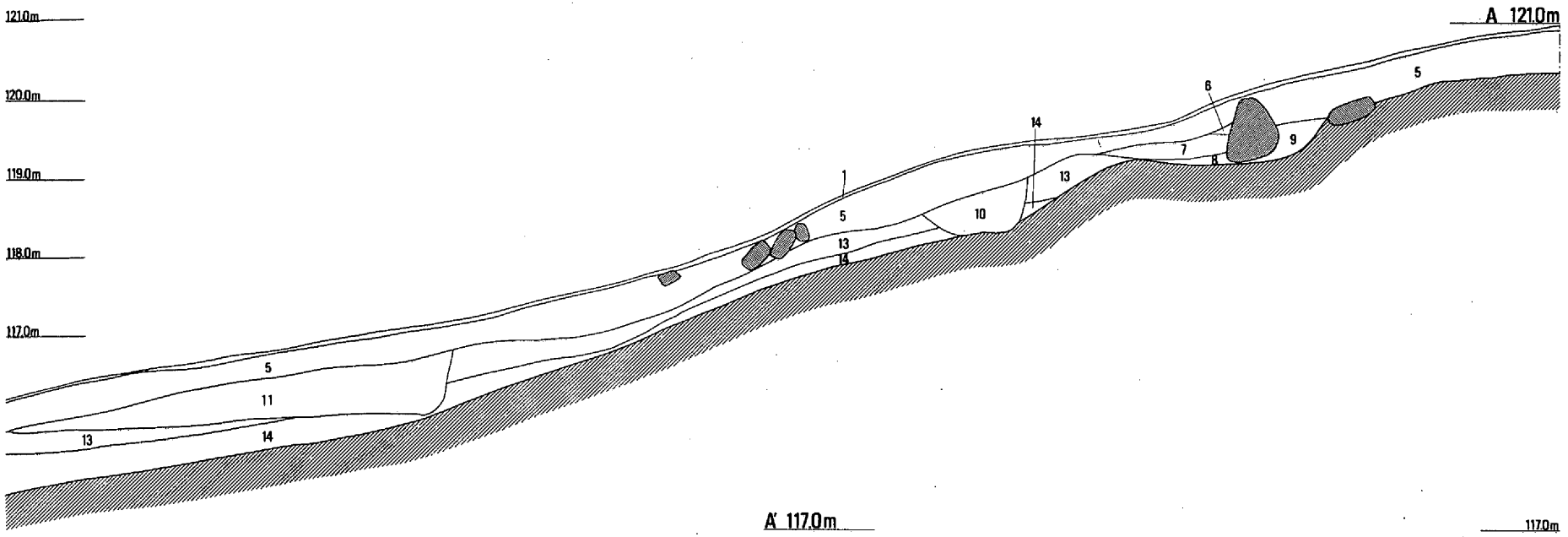


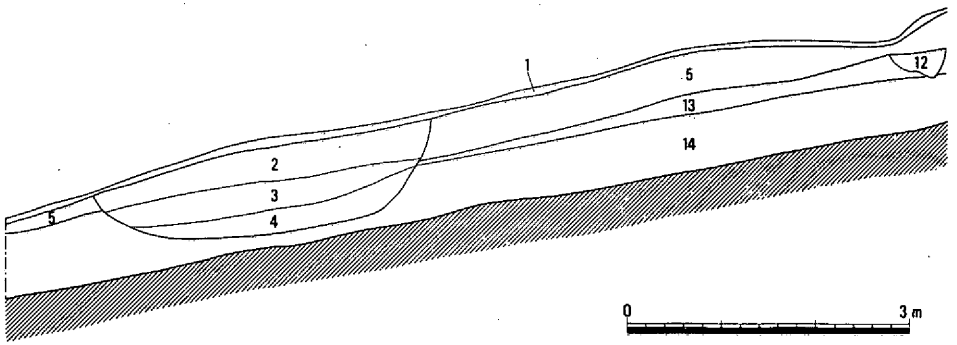
第３図　調査区位置図



第４図　遺構配置図（１/200）

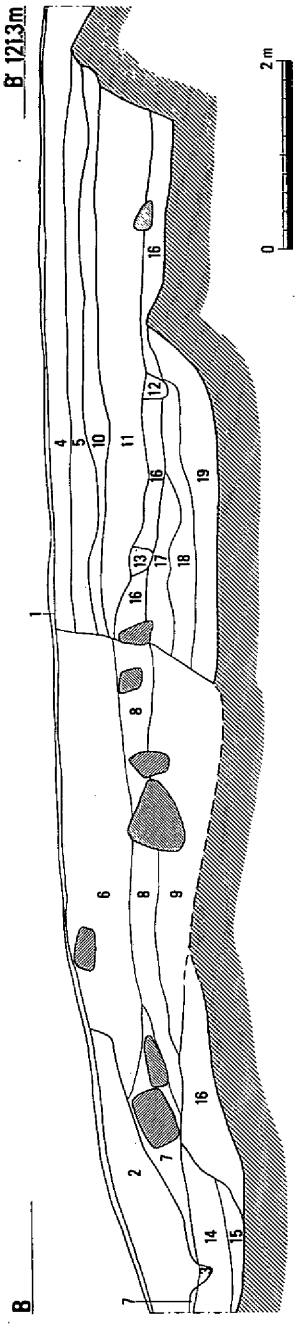
いる。５層直下の13層は、弥生時代後期の層である。この層の上面から、竪穴住居や土壙－２・４などが掘られている。13層直下の14層からは、今回の調査により土壙や炉跡が確認された。この層やこの層から検出される遺構からは、遺物が出土せず確実な年代は不明だが、後期以前にも遺跡が営まれていたのは確実である。さらに遺跡の東西方向への広がりを確認するため、２・３トレンチを入れた。２トレンチ（第６図）では１トレンチで確認された古墳時代以降の土砂崩れ跡のほかに、他にもいくつかの土砂崩れ跡が発見された。２・３層は現代と思われる土砂崩れ跡である。６～９層は、中世以降の土砂崩れ跡である。50cm～100cmの礫が多量に含まれている。１トレンチで確認された古墳時代以降の土砂崩れ跡は、４・５層になる。11層は弥生後期の層で、その直下の16層から掘り始まる12層





層位	色調	性格	粘性	しまり	備考
1	暗褐色	現表土	なし	なし	腐葉土層
2	茶褐色	現代攪乱(肥料跡)	なし	なし	
3	暗褐色	現代攪乱(肥料跡)	なし	なし	
4	暗灰色	現代攪乱(肥料跡)	なし	やや有り	
5	暗茶褐色	流土	やや有り	なし	
6	茶褐色	石室堆積土	やや有り	なし	
7	茶褐色	石室堆積土	やや有り	やや有り	
8	暗茶褐色	石室堆積土	なし	あり	砂質
9	茶褐色	石室裏込め	やや有り	なし	
10		土壙4			
11		竪穴住居			
12		土壙2			
13	暗赤褐色	弥生後期	なし	あり	
14	暗茶褐色	弥生後期以前	やや有り	あり	

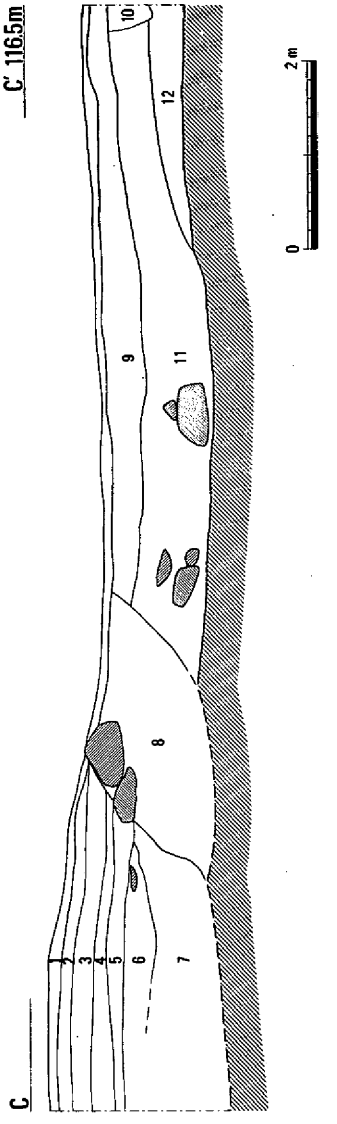
第5図　第1トレンチ土層断面図（1/80）



層位	色調	性格	粘性	しまり	備考
1	明褐色	現表土	なし	なし	廃棄土
2	暗茶褐色	流土（現代）	なし	なし	砂質
3	暗褐色	流土（現代）	なし	なし	
4	暗茶褐色	流土（古墳）	やや有り	なし	
5	茶褐色	流土（古墳）	やや有り	やや有り	
6	暗茶褐色	流土（中世）	なし	なし	砂質
7	暗茶褐色	流土（中世）	やや有り	有り	砂質
8	暗黄褐色	流土（中世）	なし	なし	砂質
9	明茶褐色	流土（中世）	なし	なし	砂質

10	茶褐色	弥生包含層	やや有り	やや有り	
11	暗茶褐色	弥生後期	なし	有り	
12	暗褐色	土壙5	なし	やや有り	
13	明褐色	土壙6	なし	やや有り	
14	茶褐色	流土？（弥生）	なし	なし	砂質
15	暗茶褐色	流土？（弥生）	なし	なし	砂質
16	暗茶褐色	弥生後期以前	やや有り	有り	
17	暗茶褐色	流土？（弥生）	なし	有り	砂質
18	暗茶褐色	流土？（弥生）	なし	なし	砂質
19	暗黄褐色	流土？（弥生）	やや有り	なし	砂質

第６図　第２トレンチ土層断面図（１/80）



層位	色調	性格	粘性	しまり	含有物	備考
1	明褐色	現表土	なし	なし		廃棄土
2	暗茶褐色	流土（現代）	なし	なし	0.2cmの砂少量	
3	暗茶褐色	流土（現代）	やや有り	なし	0.2cmの砂少量	
4	暗茶褐色	流土（現代）	なし	やや有り	0.1～0.5cm砂多量	
5	暗茶褐色	流土（現代）	なし	なし	0.1cmの砂	
6	暗茶褐色	流土（現代）	なし	有り	0.2cm前後の砂と黒色土	
7	暗茶褐色	流土（現代）	なし	有り	0.1cmの砂多量	
8	暗茶褐色	流土（中世）	やや有り	なし		
9	暗茶褐色	流土（古墳）	なし	なし	砂質	
10	土壙2					
11	暗茶褐色	弥生後期	なし	あり		
12	暗茶褐色	弥生後期以前	やや有り	あり		

第７図　第３トレンチ土層断面図（１/80）

・13層をそれぞれ土壙－５・６と名付けた。これら弥生包含層の下になる14・15・17・18・19層は砂質になり、弥生時代の土砂崩れ跡かもしれない。しかし調査区内の他の箇所とはつながらず、たまりの跡かもしれない。第２トレンチより谷側にある第３トレンチ（第７図）では、現代と中世以降の土砂崩れ跡が確認された。２～７層までが現代の土砂崩れ跡であり、第２トレンチ地点よりも砂質になり、深さが増す。８層が、中世以降の土砂崩れ跡である。50cm～100cm前後の礫が多量に含まれる。

これら３本のトレンチから、調査区の北東側の全域は、現代と中世以降の土砂崩れ跡により大半が破壊されていることが判明した。よって遺跡はこれ以上北東側へ広がらないと判断される。また遺構の残る箇所も、その上層は古墳時代以降の土砂崩れ跡によって削平される。少なくとも３回以上の土砂崩れがあるわけで、遺跡の残存状況はきわめて悪い。また土砂崩れの中に弥生中期の土器が多量にあり、近隣に弥生中期の遺跡が存在すると思われる。　（小林）

第２節　弥生時代の遺構・遺物

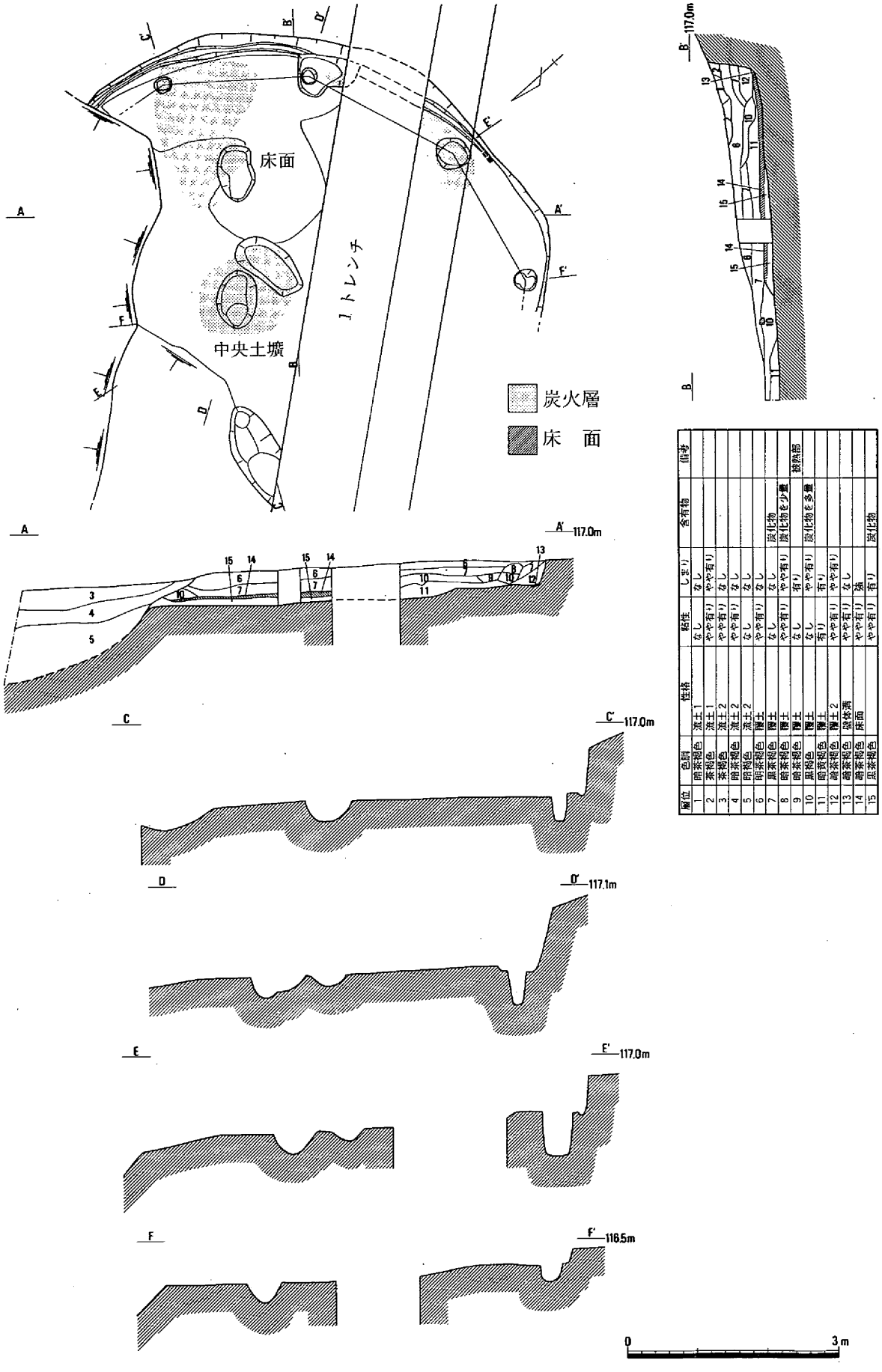
本遺跡における弥生時代の遺構は、竪穴住居１軒、たまり１基、土壙６基、炉跡２基である。ほとんどの遺構は弥・後・Ⅲ期に属するが、検出面が１層低い遺構も存在する。このうち土壙－５と６は、第２トレンチの壁面のみでの確認である。検出面は土壙－１や炉跡と一緒になるなるが、遺物が出土していないことから詳細は不明である。調査区の南側と西側は地山が露出するため、遺跡の広がりは北側と東側に限定される。その北側と東側も、何回もの土砂崩れによって残存度が悪い。土砂崩れの覆土中には弥・中・Ⅱ期の土器が多く含まれ、本遺跡の南東側に弥・中・Ⅱ期に属する遺跡の存在が予想される。なお土砂崩れ跡は弥生時代の遺構ではないが、弥生の遺物が多いためここに記す。

竪穴住居（第８・９図）

竪穴住居は、調査区の中央部よりやや北西に位置する。北東側を中世の土砂崩れによって、北西部を古墳時代以降の土砂崩れによって削平される。よって残存率は、１/２程度である。柱構造は、東側と南側の４本のみが残存している。残存している柱穴は、東側からそれぞれ26cm×24cm×40cm、25cm×23cm×45cm、50cm×47cm×56cm、33cm×33cm×56cmを測る。柱間は、東側からそれぞれ100cm、115cm、105cmになる。柱穴は４本とも壁体ぎりぎりに掘られている。柱穴の数は８本以上になることは確実であるが、正確な数は不明である。柱穴の位置から考えて、竪穴住居の最大径は７ｍ前後になることが予想され、平面形態は多角形を呈する。壁体溝は東側から南側にかけて存在し、幅18cmで深さが６cmを測る。中央穴は、主軸がＮ－42°－Ｗで長軸長82cm、短軸長55cm、深さ31cmを測る。また中央穴に近接した南側と、南東側１ｍ付近にも土壙が存在する。竪穴住居の床面は、中央穴の東側のみに残存する。炭化物を含んだ層が、中央穴上面と東側の１部、壁体溝付近に残る。検出面から床面までの深さは61cmを測り、床面は海抜 116.1ｍ付近で一定する。

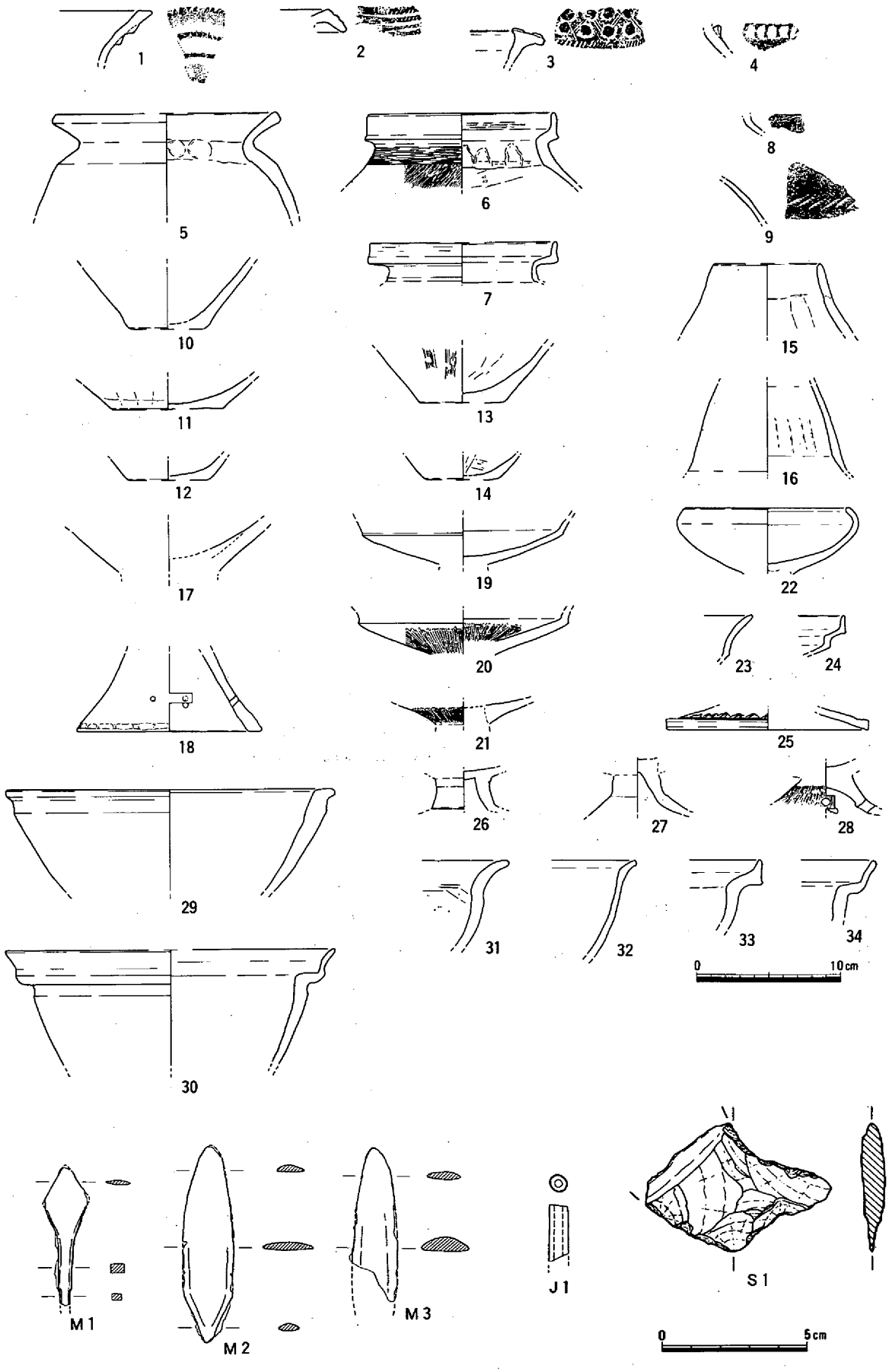
出土遺物は、弥生土器・鉄器・石器・玉などがある。**1・2・3**は壺の口縁部である。**1**は、口縁部に刻目文があり、外面にも２条の貼付凸帯を付けた後刻目文を入れる。**2**は端面に刻目文を入れた後、３条の凹線文を入れる。**3**は格子状に櫛描き文を入れた後、２列に円形浮文を付ける。**4**は甕の頸部であり、貼付凸帯を付けた後指頭圧痕文を入れる。以上の遺物は弥生中期に位置付けられるが、すべては覆土の上層から出土している。**8**は壺の口縁部であり、鋸歯文が入れられる。**15**は短頸壺になり、**16**は脚付壺になる。**5・6・7・10・11・12・13・14**は甕である。**5**は、口縁部がく字に立ち上がる。**6・7**は、口縁端部が垂直に立ち上がる。**6**は外面がハケメで、頸部に櫛描き文が施られる。**10～14**は底部であり、平底になる。**5**が弥・後・Ⅱ期になる以外は、全て弥・後・Ⅲ期になる。**17～28**は高杯である。**17**は杯部と脚部を円盤充塡で接合し、**21・22・26・27・28**は脚部差込による接合である。**18**は脚部に１対２孔の円孔がある。口縁部形態は、外反して立ち上がるタイプ**19・20・23**と、内湾するタイプ**22**、段をなして立ち上がるタイプ**24**がある。**17**が弥・後・Ⅰ期、**18**が弥・後・Ⅱ期になる以外は、全て弥・後・Ⅲ期である。**29～34**は鉢である。口縁部形態は、肥厚するタイプ**29**、段をなして外反するタイプ**30・34**、外反するタイプ**31**、肥厚した端部をつまみ上げるタイプ**33**がある。弥・後・Ⅰ～Ⅲ期である。**Ｍ１・Ｍ２・Ｍ３**は、鉄鏃である。**Ｊ１**は緑色凝灰岩製の管玉である。**Ｓ１**はスクレイパーであるが、石匙の可能性もある。サヌカイト製である。

竪穴住居からは弥・中期の土器も含まれるが流れ込みである可能性が強く、検出面や後期の土器の比率から考えて、弥・後・Ⅲ期の築造が考えられる。

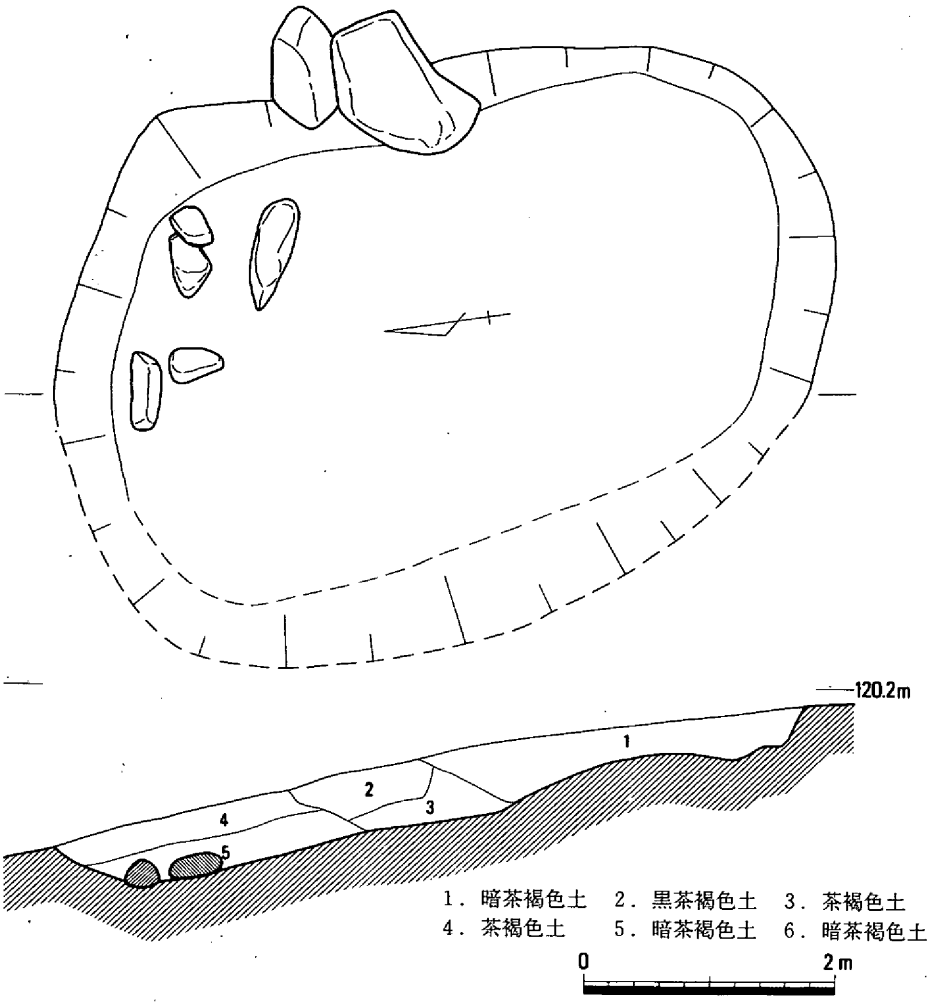


層位	色調	性格	粘性	しまり	含有物	備考
1	明茶褐色	流土１	なし	なし		
2	茶褐色	流土１	やや有り	やや有り		
3	茶褐色	流土２	やや有り	なし		
4	暗茶褐色	流土２	やや有り	なし		
5	明褐色	流土２	なし	なし		
6	明茶褐色	覆土	やや有り	なし		
7	黒茶褐色	覆土	なし	なし	炭化物	
8	暗茶褐色	覆土	やや有り	やや有り	炭化物を少量	
9	暗茶褐色	覆土	なし	有り		被熱部
10	黒褐色	覆土	なし	やや有り	炭化物を多量	
11	暗黄褐色	覆土	有り	有り		
12	暗茶褐色	覆土２	やや有り	やや有り		
13	暗茶褐色	壁崩落	やや有り	なし		
14	暗茶褐色	床面	やや有り	強		
15	黒茶褐色		やや有り	有り	炭化物	

第８図　竪穴住居（１/80）



第９図　竪穴住居出土遺物



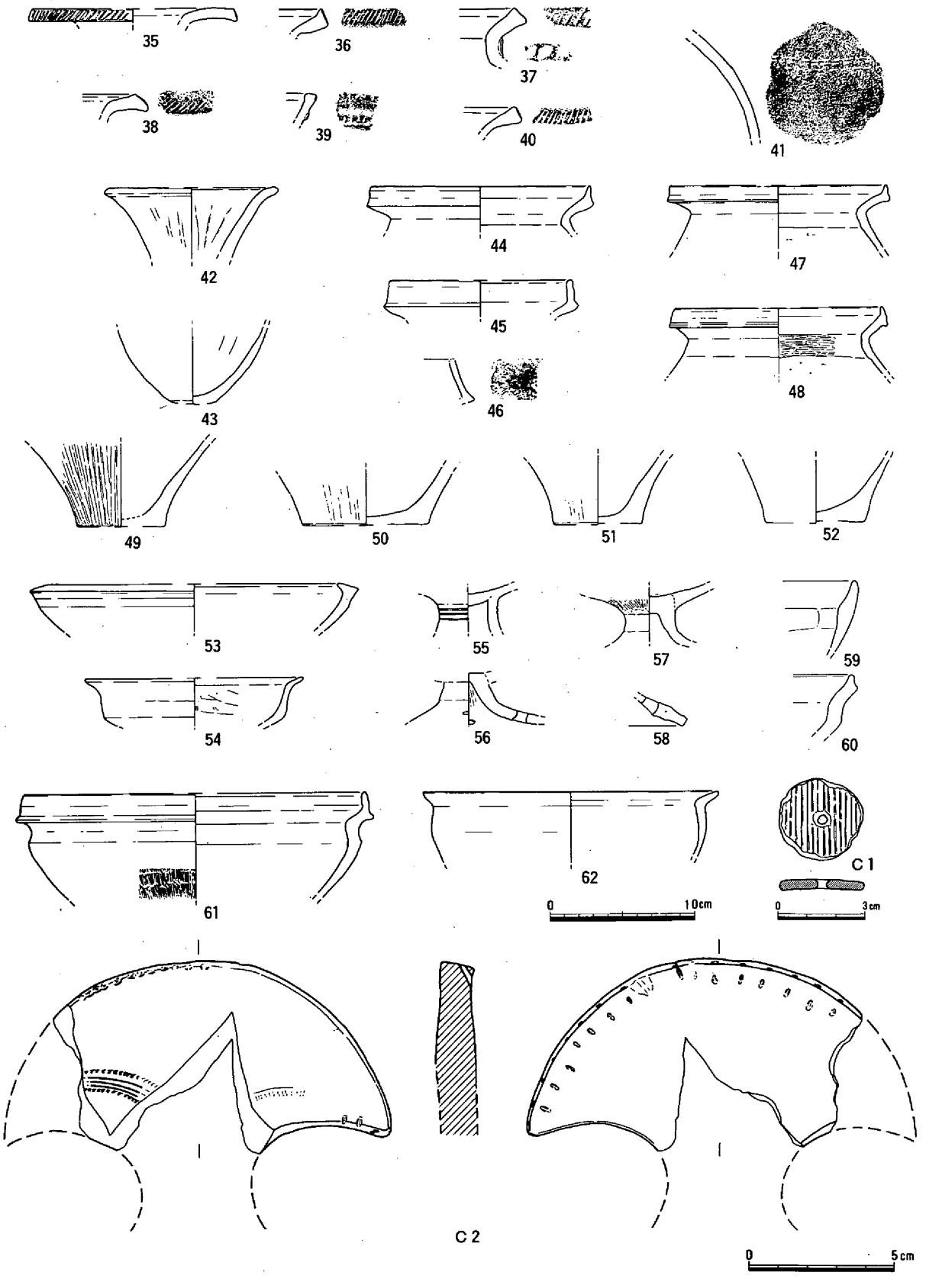
第10図　たまり（1/80）

たまり

（第10・11・12図）

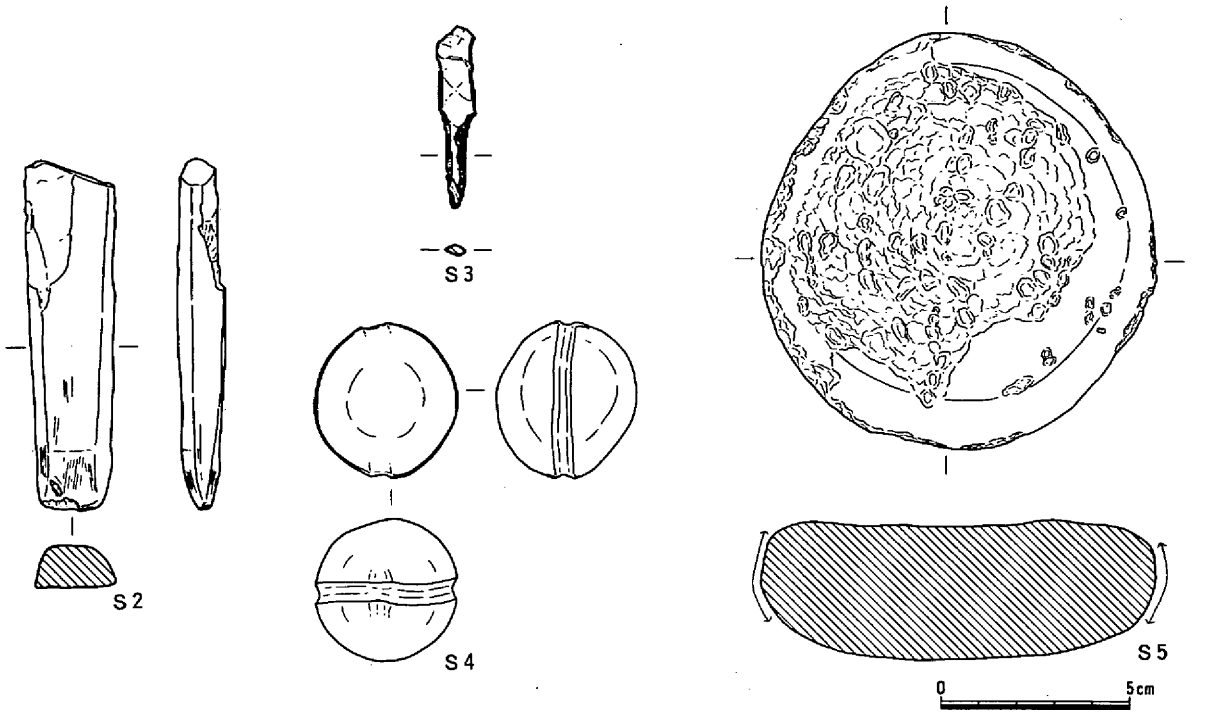
たまりは調査区の南東側に位置する。たまりの南側には土壙－１があり、これを切っている。西側には段林古墳の石室があり、その堀り方によって切られる。たまりの西側は、古墳時代以降の土砂崩れによって大半が失われているため、遺構の残存率は１/２程度である。主軸はＮ－０°になると思われ、長軸長 8.4ｍで、短軸長は概ね6.2ｍになる。平面形態は楕円形を呈する。深さは確認面より65cmを測り、断面形態は皿状を呈する。底面は南側から北側に向かって下っており、平行にはならない。よって人為的のものとは考えにくい。標高の低い北側には、１ｍ前後の礫が点在する。覆土は６層からなる。１層の時期、２・３層の時期、４・５層の時期の.3時期に分かれる。

出土遺物は、弥生土器などの小片（中期から後期）と石器などがある。遺物は底面付近にはほとんどなく、大半が浮いた状態で出土する。**35～40**は、壺の口縁部である。**35**は口縁部が外側に屈曲して開き、端部に粗く深い刻目文がある。**36**は口縁部が肥厚し、端部をわずかにつまみ上げている。端面には刻目文がある。**37**は口縁部がくの字に立ち上がる。端面には刻目文がある。頸部に貼り付け凸帯を付けた後、指頭圧痕文を施す。**38**は口縁部が外側に開き、端部に刻目文を施す。**39**は口縁部が逆ハの字に立ち上がり、端部に刻目文を施す。外面には１条の貼付凸帯があり、刻目文を施す。**40**は口縁部がくの字に立ち上がり、端部が肥厚する。端面には刻目文がある。これらは全て弥生中期に位置付けられる。**42・43・46**は壺である。**42**は口縁部で、逆ハの字に立ち上がる。外面にはミガキがかけられ、内面にはシボリの跡を残す。**46**は口縁部が内側に立ち上がる。外面には、上下２列の鋸歯文がある。水漉粘土によって丁寧に作られ、内外面には赤色顔料が塗られる。**43**は底部であり、丸底に近くなる。外面には黒斑の跡を残す。**44・45・47～52**は甕である。口縁部の形態には３タイプある。くの字に屈曲し端部が上方に拡張する**44・47**のタイプ、くの字に屈曲し端部が上下に拡張する**48**のタイプ、垂直に



第11図　たまり出土遺物

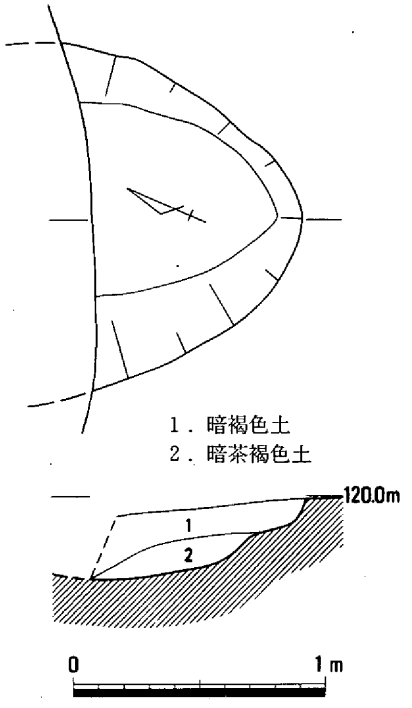
立ち上がる**45**のタイプの３つである。どれも内面調整は頸部までヘラケズリである。**48**は頸部をヘラミガキによって仕上げる。**49**～**52**までは底部である。**50**と**52**の底面が極わずかに上底になるが、**49**と



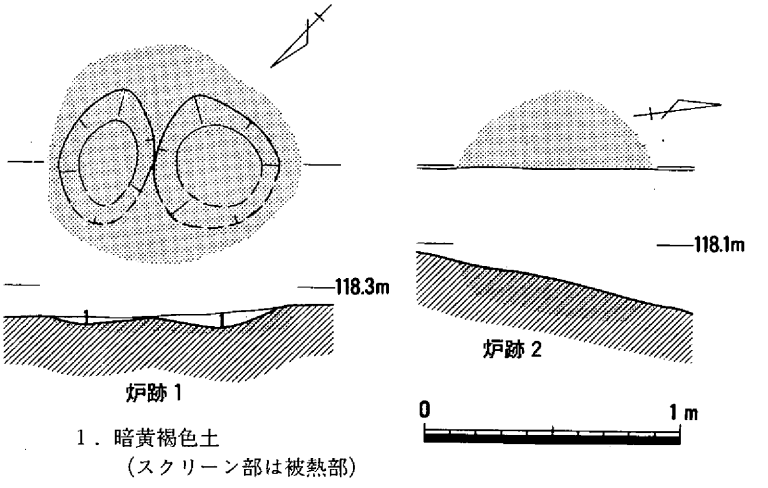
第12図　たまり出土遺物〈石器〉（１/２）

51は平底である。**49～51**には、外面にヘラミガキがある。これらは全て、弥・後・Ⅲ期に位置付けられる。**53～58**は、高杯である。**53**は口縁端部が内側に拡張し、内外面ともミガキがかけられる。外面端部には強いヨコナデが施られる。弥・中・Ⅲ期の時期である。**54**は杯部が深くなり、口縁部が外反する。弥・後・Ⅱ期の時期である。**55～58**は脚部であり、**55**が円盤充填による接合で、**56**と**57**は脚部差込による接合である。**55**には３条の凹線文がある。弥・後・Ⅰ期の時期である。**58**は端部に面をもち、円孔が１孔ある。外面端部付近には強いヨコナデが施られ、内面は円孔付近までヘラケズリされる。**56～58**は弥・後・Ⅲ期の時期である。**59～62**は、鉢である。**59**は口縁端部が丸く収まり、内面のヘラケズリによって頸部を形作る。**60**は口縁端部を上方へわずかにつまみ上げる。**61**は口縁が段をなして内側に立ち上がる。胴部外面調整はヘラメガキであり、両面に赤色顔料を塗る。**62**は口縁部が外側に開く。内外面ともヨコナデによって仕上げられ、両面に赤色顔料が塗られる。これらの時期は、弥・後・Ⅲ期になる。**Ｃ１**は、紡錘車である。2.4cm×2.4cmで、厚さが0.3cmになる。土器片を転用したものと思われ、外面であった面にはハケメが残る。**Ｃ２**は分銅形土製品である。欠損しているが、全長13.5cm前後になるものと思われる。厚さは1.4cmである。表面は凸面を呈する。表の文様は、中央部に櫛描による眉状文、その両脇を刺突文によって飾る。縁辺部には櫛描による重弧文が巡る。また側面から裏面にかけて穿孔される。右側の先端部のみは２段に穿かれる。色調は表面で明黄褐色になり、裏面は黒色を呈する。弥・中・Ⅱ期の時期である。**Ｓ２**は小型方柱状片刃石斧であり、サヌカイト製である。**Ｓ３**は石錐であり、サヌカイト製である。**Ｓ４**は石錘であり、大理石製である。**Ｓ５**は敲石であり、側面に使用痕が残る。

たまりは底面の形態や遺物の出土状態から、くぼみに土砂崩れの土が、ある程度堆積して出来たものと考えられる。出土遺物は弥・後・Ⅲ期のものが多いが、中・Ⅱ期のものも多く含まれる。断面から判断して最低３段階の堆積が考えられるが、最終的な堆積は、弥・後・Ⅲ期の時期になる。



第13図　土壙－１（１/30）



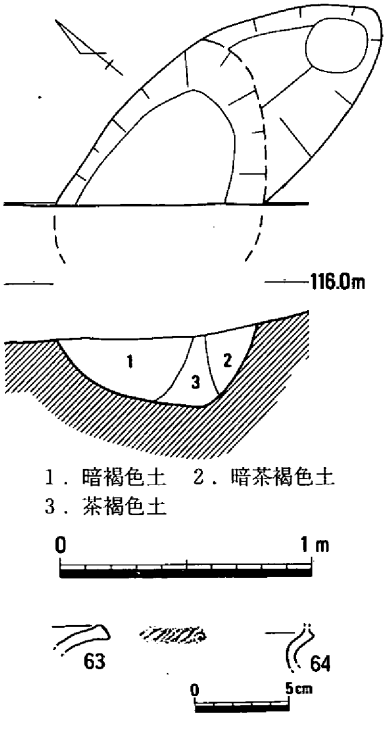
第14図　炉跡－１・２（１/30）

土壙－１（第13図）

土壙－１は、調査区の南東側に位置し、たまりの南側にある。たまりによって北半分が切られているが、主軸がＮ－23°－Ｗで、長軸長199cm、短軸長150cmの楕円形になると思われる。遺物は出土していないが、後期に位置付けられるたまりに切られていることと、検出面が後期の面より１層下がることから、弥生後期以前の築造が予想される。

炉跡－１・２（第14図）

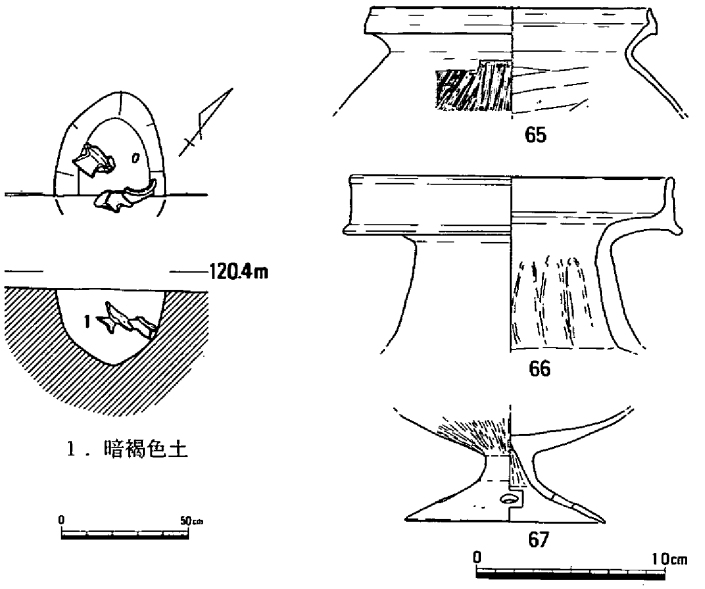
炉跡１・２は、共に調査区の南東側に位置し、たまりの北西側にある。炉跡１・２のお互いの距離は、80cmと近接している。炉跡－１は北半分が、炉跡－２は東半分が半壊している。炉跡－１は炉床が２つ存在し、北側の１つが主軸Ｎ－30°－Ｗ、長軸長50cm、短軸長36cmになり、南側の１つが主軸Ｎ－58°－Ｗ、長軸長54cm、短軸長48cmになると予想される。２つとも断面形態は、皿状を呈する。炉跡－２は、炉床が残っておらず、被熱部のみ残存する。２基ともに遺物の出土はないが、検出面が土壙－１と同じであることから、弥生後期以前の築造が予想される。



第15図　土壙－２（１/30）・出土遺物（１/４）

土壙－２（第15図）

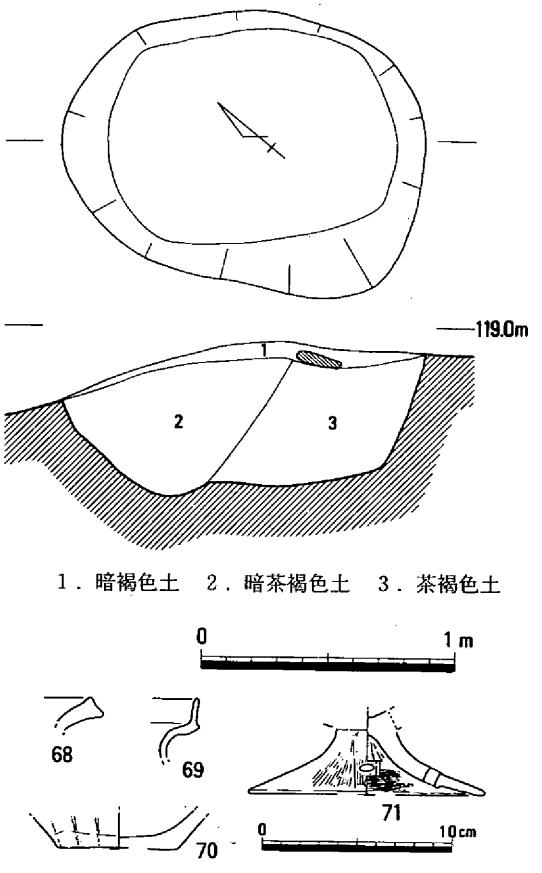
土壙－３は調査区の北西側に位置し、竪穴住居の北側になる。南西側が半壊し、南東側も撹乱によって壊されている。主軸がＮ－67°－Ｅ、長軸長100cm、短軸長75cmの不整楕円形になるものと予想される。土壙の深さは、検出面より27cmを測り、断面形状は皿状を呈する。出土遺物は弥生土器の小片が数点である。**63**は、弥・中・Ⅱの壺の口縁であり、口縁端部に粗く深い刻目文がある。**64**は、弥・後・Ⅲの甕の口縁である。**63**は比較的上層から出土しており、流れ込みである可能性が高い。また検出面が竪穴住居やたまりなどと同じになることから、築造年代が弥・後・Ⅲ期になる可能性が高い。



第16図　土壙－３（１/30）・出土遺物（１/４）

土壙－３（第16図）

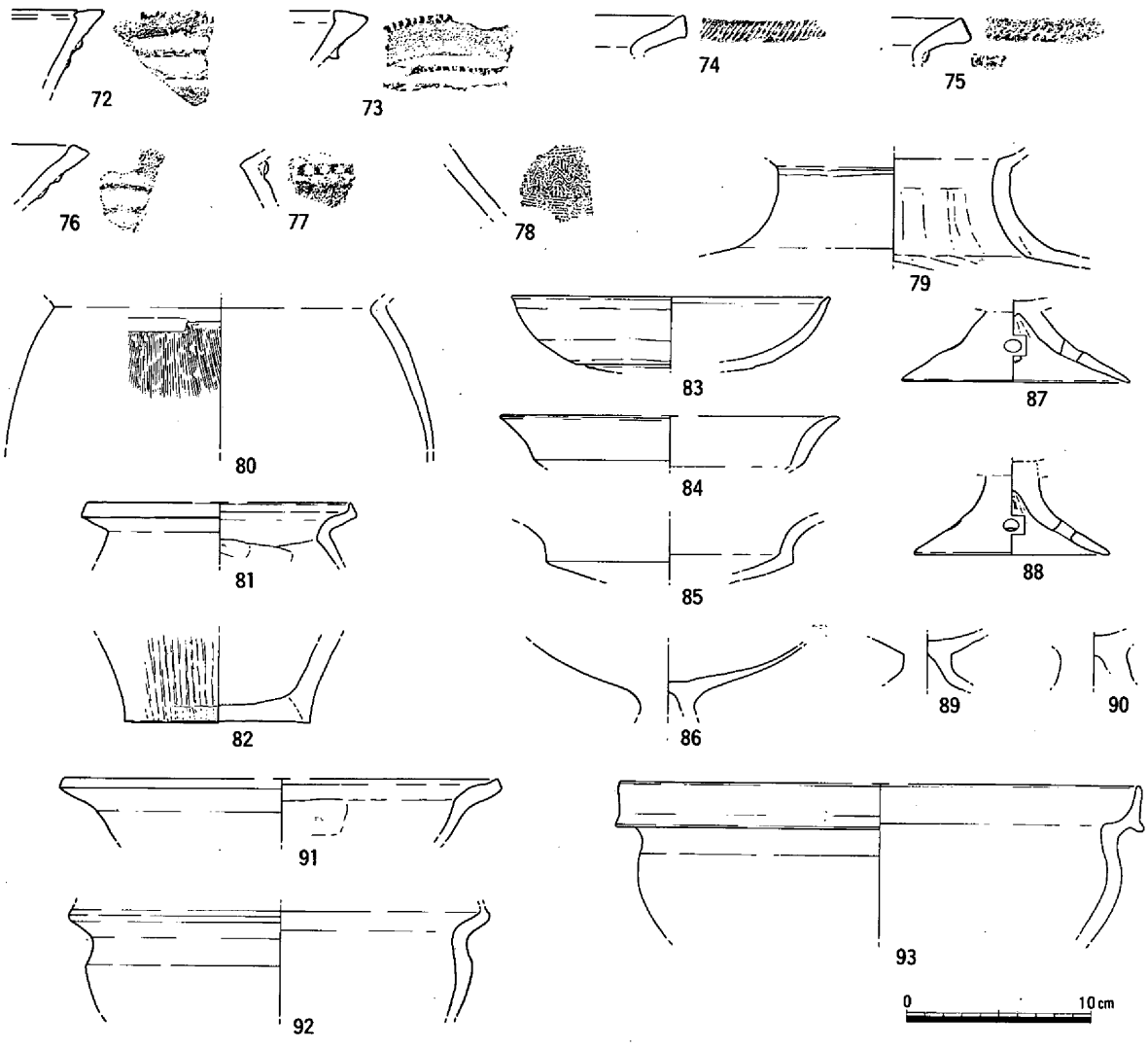
土壙－３は、調査区の南東側に位置し、北西方向60cmの位置に土壙－１が近接する。南東側の１/３が失われているが、主軸がＮ－30°－Ｗ、長軸長66cm、短軸長36cmの楕円形を呈していたものと考えられる。深さは30cmで、半円形を呈する。覆土の中には、弥生土器が３点存在した。**65**は、甕である。口縁の端部が上下に拡張する形態である。外面調整は胴部がハケメで頸部をヨコナデする。内面は頸部までヘラケズリである。**66**は、長頸壺の口縁部から頸部にかけてである。口縁部が段をなして垂直に立ち上がる形態で、端部が上下に拡張する。外面調整は頸部にミガキがかけられ、口縁部はヨコナデである。内面は頸部までヘラケズリである。**67**は、高杯の脚部である。円孔は４孔存在する。脚部は差し込みによって接合される。３点とも弥・後・Ⅲ期になる。出土遺物の時期と検出面から、土壙－３は、弥・後・Ⅲ期に築造されたものと考えられる。



第17図　土壙－４（１/30）・出土遺物（１/４）

土壙－４（第17図）

土壙－４は、調査区の南東側に位置し、東側80cmにたまりがあり、南側には段林古墳の石室が近接する。南西側は石室の裏込めにより上部が破損している。主軸はＮ－40°－Ｗで、長軸長144cm、短軸長105cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。深度は検出面から57cmであり、覆土は３層からなる。断面図から考えて、２つの土壙が切り合った可能性がある。出土遺物は、弥生土器が数片ある。**68**と**69**は、甕の口縁部である。**68**はくの字に立ち上がり肥厚し、端部に面をもつ形態である。**69**は段をなして垂直に立ち上がる形態である。**70**は、甕の底部である。底面はわずかに上底気味になるが、平底に近い。外面はナデによって調整され、黒班がある。**71**は、高杯の脚部である。残存率は１/４で円孔が１孔あけられる。内外面ともハケメ調整で、どちらの面にも赤色顔料が塗られる。接合方法は脚部差込である。これらはすべて弥・後・Ⅲ期である。出土遺物と検出面から、土壙－４は弥・後・Ⅲ期に築造されたと考えられる。



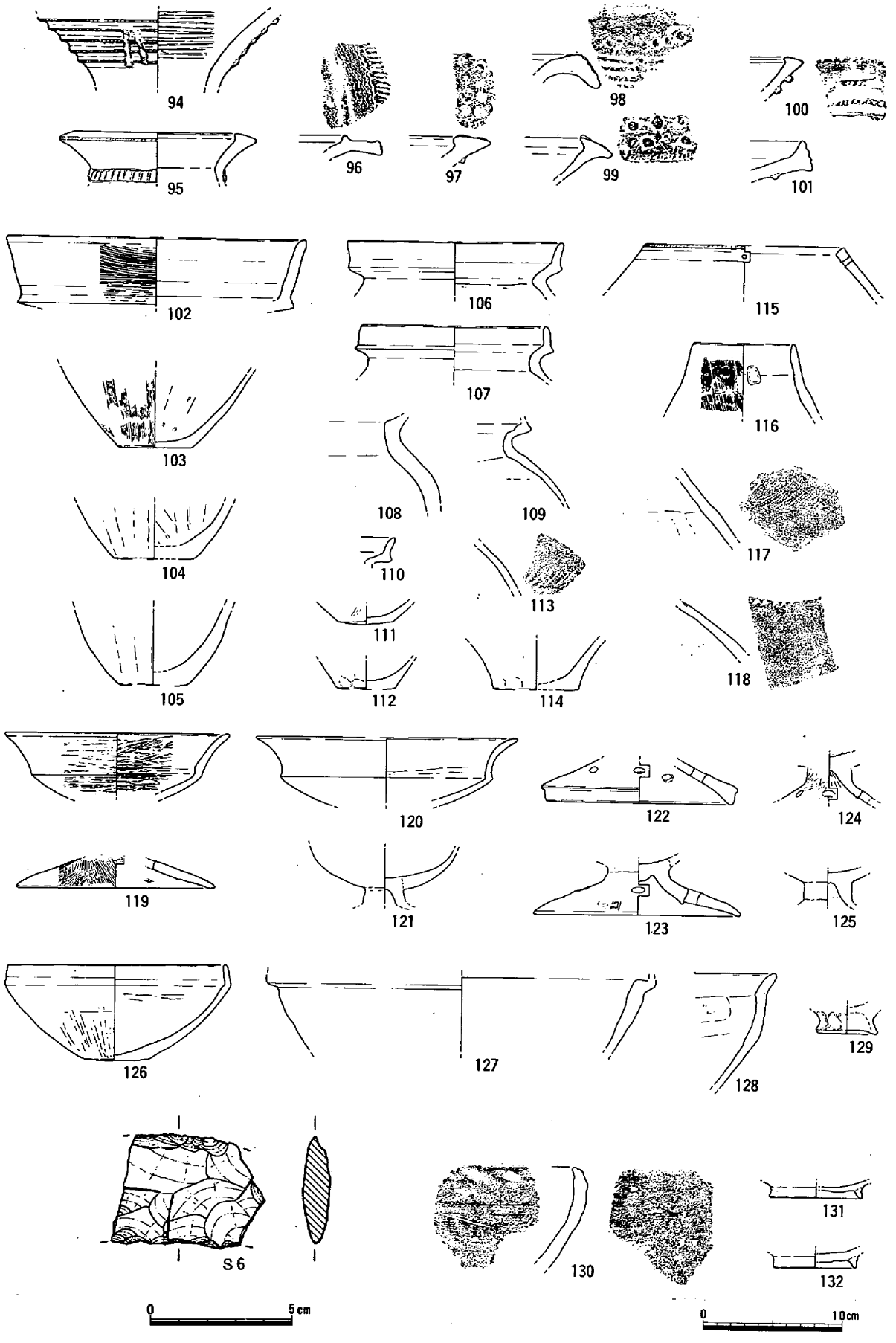
第18図　古墳時代以降土砂崩れ跡出土遺物（１/４）

古墳時代以降土砂崩れ跡（第18図）

古墳時代以降土砂崩れ跡は、弥生後期の確認面の上層にあり、段林古墳の盛土を切っている。この層は調査区の北東側半分の全域に見られ、確実な範囲は確定できない。出土遺物は、弥生土器の小片が多数含まれる。**72～76**は壺の口縁部である。逆ハの字に立ち上がって端部が内側に拡張する**72･73**のタイプと、くの字に立ち上がり端部が肥厚する**74･75**のタイプ、逆ハの字に立ち上がる**76**などがある。どのタイプも端部に刻目文があり、外面に貼り付け凸帯がある。**77･78**は甕である。**77**は頸部に貼り付け凸帯があり、指頭圧痕文で飾られる。**78**には櫛描波条文が描かれる。１単位は８本である。これらは弥生中期の時期になる。**79**は壺であり、外面頸部上方に２条の擬凹線文がある。内面は頸部までヘラケズリである。**80～82**は甕である。**80**は外面ハケメであり、**81**は口縁端部を上方につまみ上げている。**82**はわずかに上底気味である。**83～90**は高杯である。杯部の形態は丸く収めるタイプ**83･86**と、口縁部が外反して立ち上がるタイプ**84･85**がある。脚部の接合は、全てが差込による（**86～90**）。**87･88**には円孔が４孔ある。**91～93**は鉢である。これらは全て弥・後・Ⅲ期に位置付けられる。

中世以降の土砂崩れ跡（第19図）

中世以降の土砂崩れ跡は、調査区の東側から北側にかけて存在し、山側から谷側にかけて調査区を縦断する。覆土中には50cm～100cm前後の礫が多量に含まれる。出土遺物は大半が弥生土器の小片で

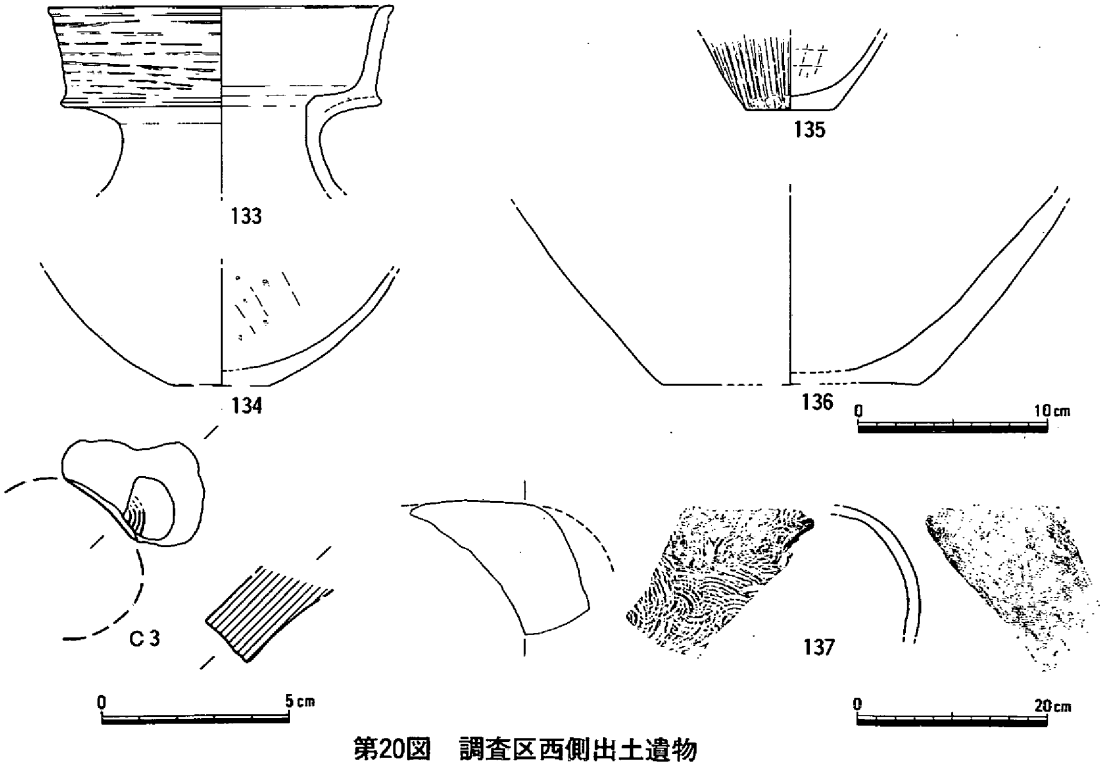


第19図　中世以降土砂崩れ跡出土遺物

あるが、縄文土器と中世の土器が混じる。**94～102**は壺である。この内**94～100**までは弥生中期であり、貼付凸帯・刻目文・円形浮文・棒状浮文などがある。**101**は口縁部端面に３条の凹線文があり、外面に１条の貼付凸帯がある。弥・後・Ⅰ期の時期である。**102**は長頸壺の口縁部である。内外面とも赤色顔料が塗られる。胎土からみて特殊壺になる可能性がある。**115**は無頸壺である。円孔が１孔あり、口縁端部に刻目文がある。**116**は短頸壺であり、外面調整はカキメである。**103～114・117・118**は甕である。口縁部形態は、外側に立ち上がるタイプ**106・110**と、やや内側に立ち上がるタイプ**107・109**がある。底部形態は、平底のなるタイプ**103～105・112・114**、やや丸底になるタイプ**111**がある。胴部外面に列点文がある**113・117**、頸部に刻目文がある**118**などがある。これらは弥・後・Ⅰ～Ⅲ期の時期である。**119・120・122～125**は高杯である。**119・120**などは、口縁部形態が外側に立ち上がるタイプである。**122**は脚部端面に稜線をもち、面を作っている。全ての脚部の接合は、差込による。**121**は短脚付壺になると思われる。**126～129**は鉢である。**126**はやや小型で口縁部が内側に立ち上がる。**129**には台がつく。高杯、鉢とも全て弥・後・Ⅲ期の時期になる。**130**は縄文土器で、縄文後期の深鉢になる。**131・132**は、吉備系土師器椀である。**131**が13世紀の時期で、**132**は14世紀になる。**Ｓ６**は、スクレイパーであり、サヌカイト製である。

調査区西側（第20図）

調査区西側で古墳石室入口の西側付近に、遺物の集中地点がある。ほとんどが弥生土器であるが、中には古墳から流れ落ちたと思われる須恵器もある。**133**は長頸壺の口縁部である。口縁部は段をなして外側に立ち上がる。外面には、凹線文が９条ある。この壺の胎土は特殊壺の胎土と極似しており、特殊壺の可能性もある。**134・136**は壺の底部である。**134**は底面が器形に比べて小さくなる。**136**はやや上底気味である。**135**は甕の底部であり、平底になる。これらは全て弥・後・Ⅲ期の時期である。**137**は須恵器の横瓶である。段林古墳に伴うものと思われる。**Ｃ３**は、分銅形土製品の小片である。櫛描による眉状文が認められる。弥・中・Ⅱ期の時期である。（小林）

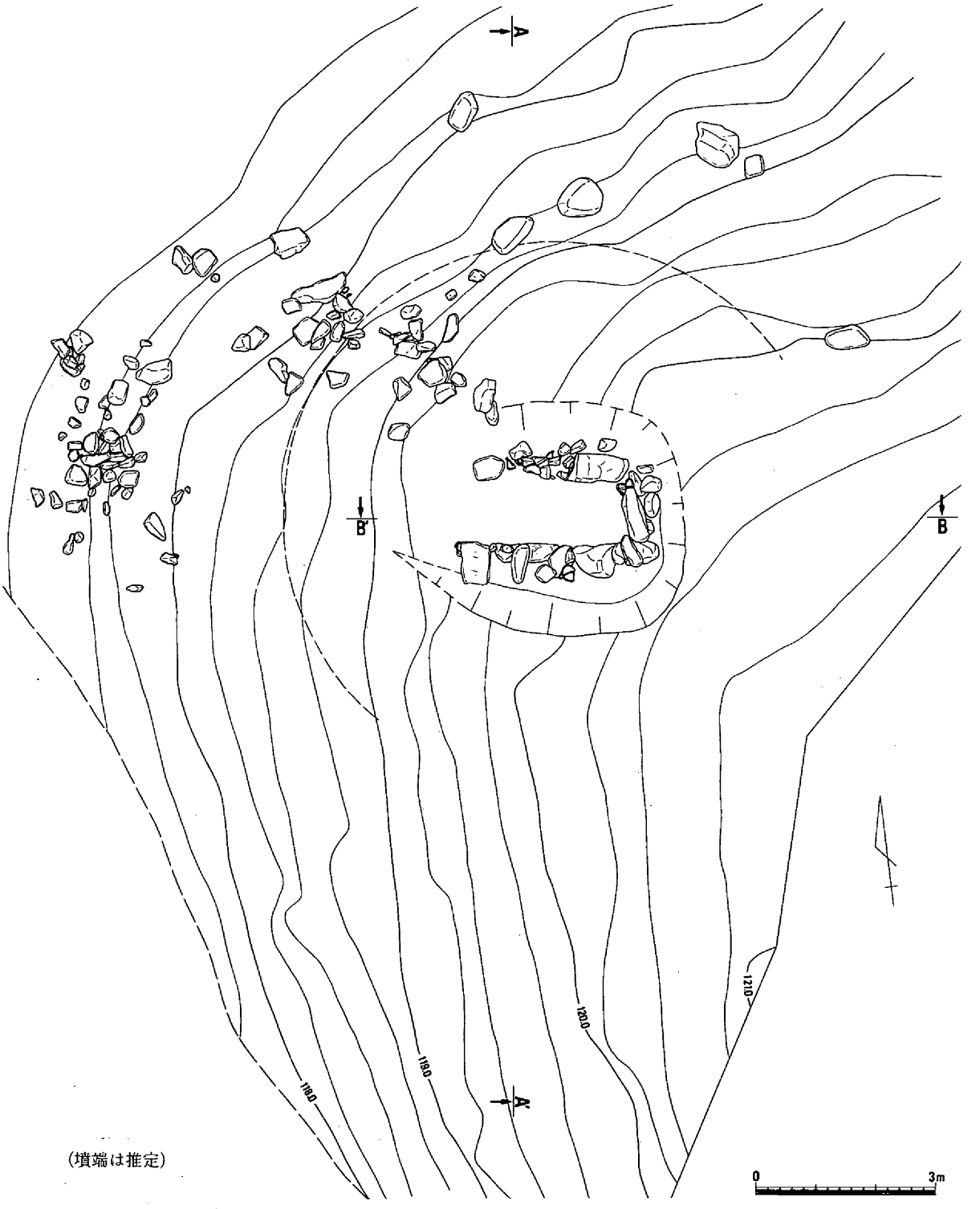


第20図　調査区西側出土遺物

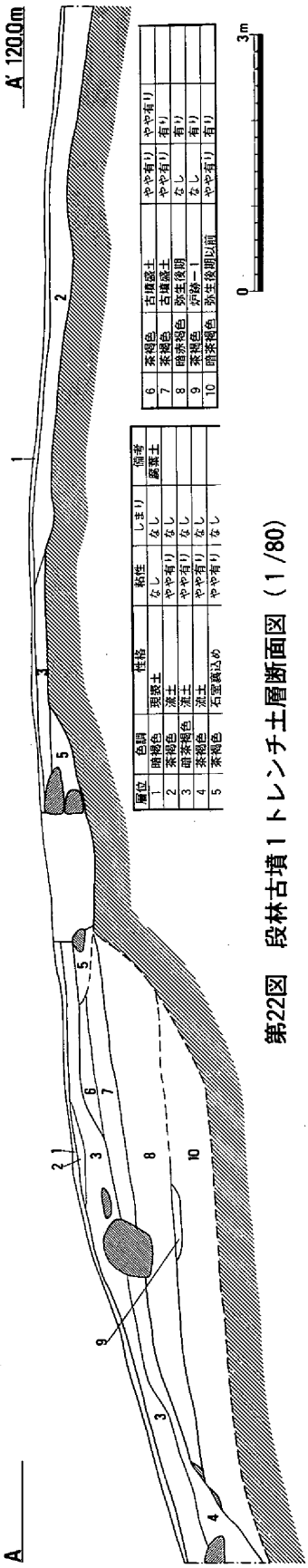
第３節　段林古墳の調査

段林古墳（第21・22・23図）

段林古墳は、調査区の南東側にある。北東側と北側には、たまりと土壙－４が近接する。どちらも石室の裏込めで切っている。段林古墳は、平成８年度の一次調査によって発見された。一次調査では南側の側壁の一部と、須恵器の杯蓋（３）、鉄鏃（M11･12･15･16･18･22）などが出土したが、トレン



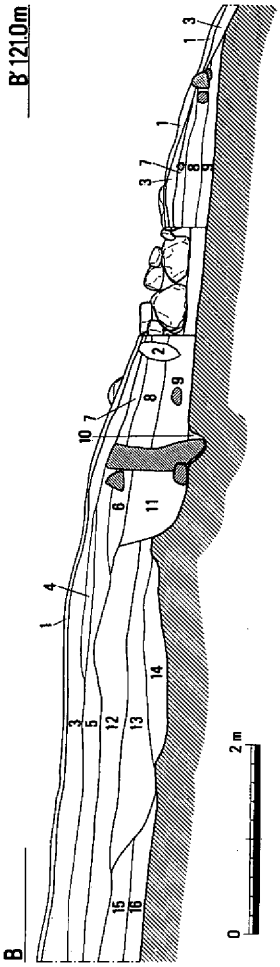
第21図　段林古墳（１/100）



層位	色調	性格	粘性	しまり	備考
1	暗褐色	現表土	なし	なし	厳密土
2	茶褐色	流土	やや有り	なし	
3	暗茶褐色	流土	やや有り	なし	
4	茶褐色	石室裏込め	やや有り	なし	

6	茶褐色	古墳盛土	やや有り	やや有り	
7	茶褐色	古墳盛土	やや有り	有り	
8	暗赤褐色	弥生後期	なし	有り	
9	茶褐色	炉跡一1	なし	有り	
10	暗茶褐色	弥生後期以前	やや有り	有り	

第22図　段林古墳１トレンチ土層断面図（１/80）

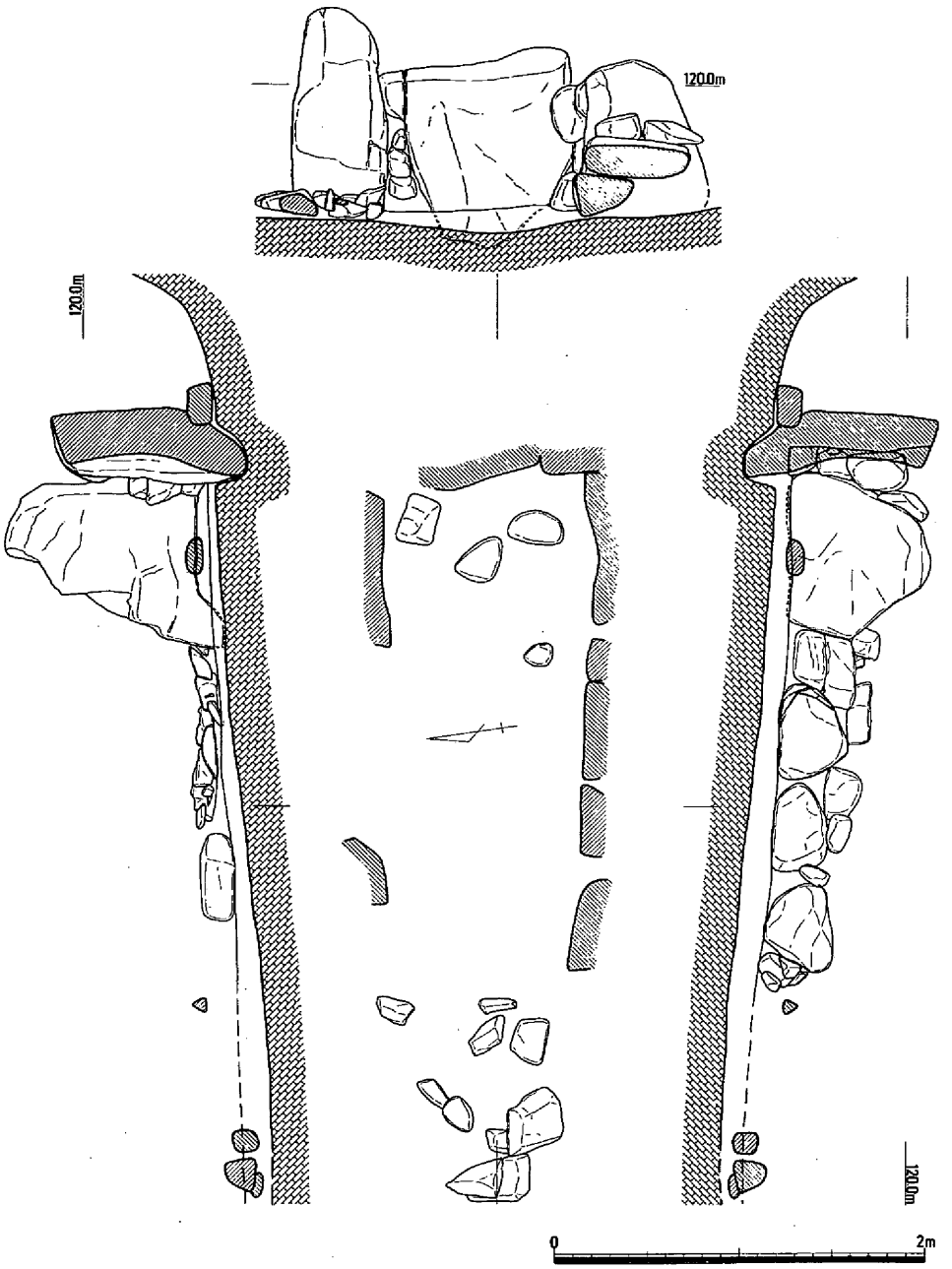


層位	色調	性格	粘性	しまり	備考
1	暗褐色	現表土	なし	なし	厳密土
2	暗褐色	埋葬	なし	なし	
3	暗茶褐色	流土	やや有り	なし	
4	明茶褐色	流土	やや有り	なし	
5	茶褐色	流土	やや有り	やや有り	
6	茶褐色	流土	やや有り	なし	
7	茶褐色	石室堆積土	やや有り	なし	
8	茶褐色	石室堆積土	やや有り	やや有り	
9	暗茶褐色	石室堆積土	なし	あり	砂質
10	暗茶褐色	奥壁版石	なし	なし	
11	茶褐色	石室裏込め	やや有り	なし	
12	茶褐色	弥生包含層	やや有り	やや有り	
13	暗茶褐色	たまり	なし	有り	
14	暗赤褐色	たまり	やや有り	有り	
15	暗赤褐色	弥生後期	なし	あり	
16	暗茶褐色	弥生後期以前	やや有り	あり	

第23図　段林古墳２トレンチ土層断面図（１/80）

チ調査であったため、全貌を明らかにするには至らなかった。

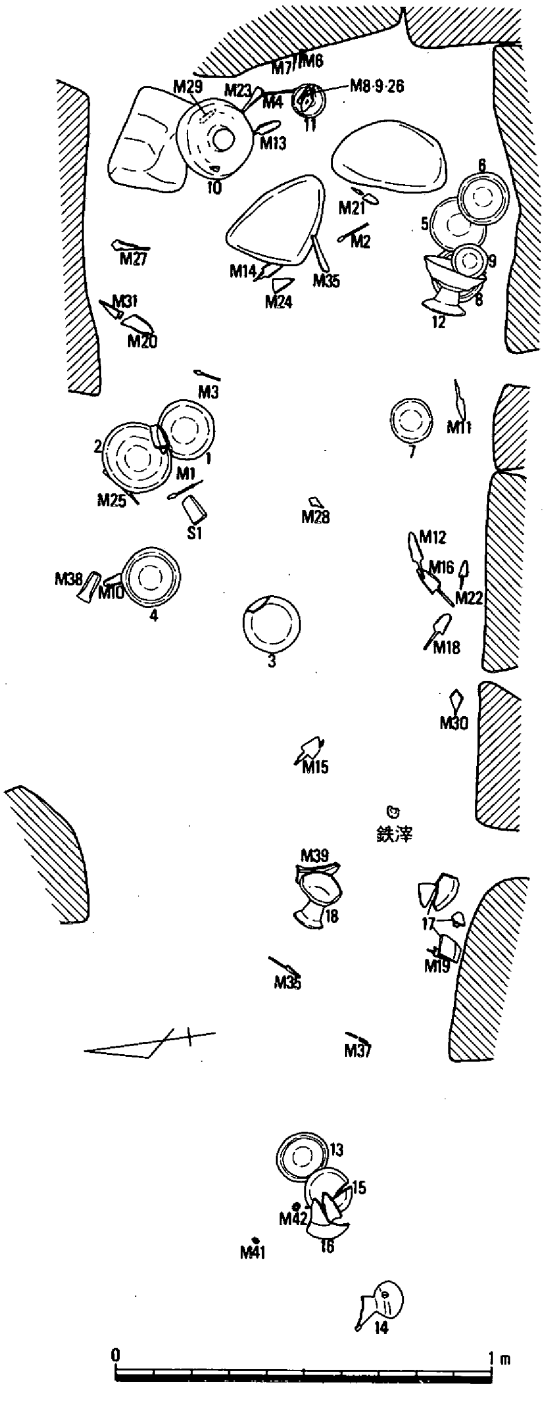
今回の調査の目的は、古墳の全貌を明らかにすることである。古墳調査前の状況は、墳丘盛土と思われる高まりが全くない状態であった。墳丘の規模を明らかにするために、南北方向と東西方向に２本のトレンチを入れ、それぞれ１・２トレンチと名付ける。１トレンチ(第22図)は、２～４層が流土となる。盛土は６・７層のみで、大半が流土によって失われている。南側(図では右)は、15cm前後の流土の下が地山になり、盛土は存在しない。古墳築造当時は自然地形を利用したものと思われる。２トレンチ（第23図）は、３～６層が流土になる。よって石室後部には墳丘盛土が全くなくなる。上部が流土によって流されたとしても、12層は弥生包含層であり、築造当時から後部の作りは甘かったものと思われる。石室自体は流土によって破壊されているが、７～９層の石室内堆積土は奥壁によって守られている。石室の床面は地山をそのまま利用している。以上のように１・２トレンチの断面図からは、墳端を決めることが困難である。石室の南側から入口付近までは、自然地形を利用しているため墳丘を形作れない。地形測量図では西側から北側にかけて、わずかに円形になる部分が作られている。この付近には弥生時代のたまりがある箇所であり、確実視は出来ないが、等高線に従えば墳丘は円墳になる。この円形に巡る等高線は石室の後部に当たる東側にはいたらない。おそらく墳丘の盛土は、西側から北側にかけてを特に強調し、その他の箇所は自然地形などを利用したものと思われる。また墳丘の規模は確実な決め手を欠くが、等高線や石室の規模などから推定して、８～９ｍ前後になると思われる。また当初墳端と考えた傾斜変換地点には、多量の石材が散らばる。これらの石材は並べられた形跡がなく、流土によって流された石室の石材が、幾分平坦になる箇所にたまったものと思われる。なお石室の掘り方は、長軸長4.8m、短軸長4.0mで断面形態は皿状を呈する。



第24図　段林古墳主体部平断面図（１/40）

主体部（第24図）

主体部は、現在天井石などが残存しないが横穴式石室である。主軸がＮ－82°－Ｗで、奥壁長は1.1ｍになる。側壁長は残存しているところで 2.7ｍになるが、床面の比較的平らな面が４ｍ付近までのび、この付近に遺物も集中することから築造当時は４ｍ前後あったものと思われる。またこの付近には礫も集中しており、閉塞石の名残かもしれない。石室の残存率は非常に悪く、奥壁と、北側は奥壁に近接する大型石と他１石、南側は５石までしか残らない。どの壁も１段目しか残存していない。石室構造は無袖であり、奥壁と奥壁に近接する両側壁の１石目に、大きめの石を使用している。奥壁の設置時のみに掘り方を掘っているが、他の箇所には掘られない。奥壁の石は１枚で、他の石に比べて平らであるが厚みがなく、安定度が悪い。石室に使用される石材は、花崗岩である。この花崗岩は県南西部に一般的にみられるものであり、現地産の石材が使用された。



第25図　主体部遺物出土状態（1/20）

遺物出土状態（第25図）

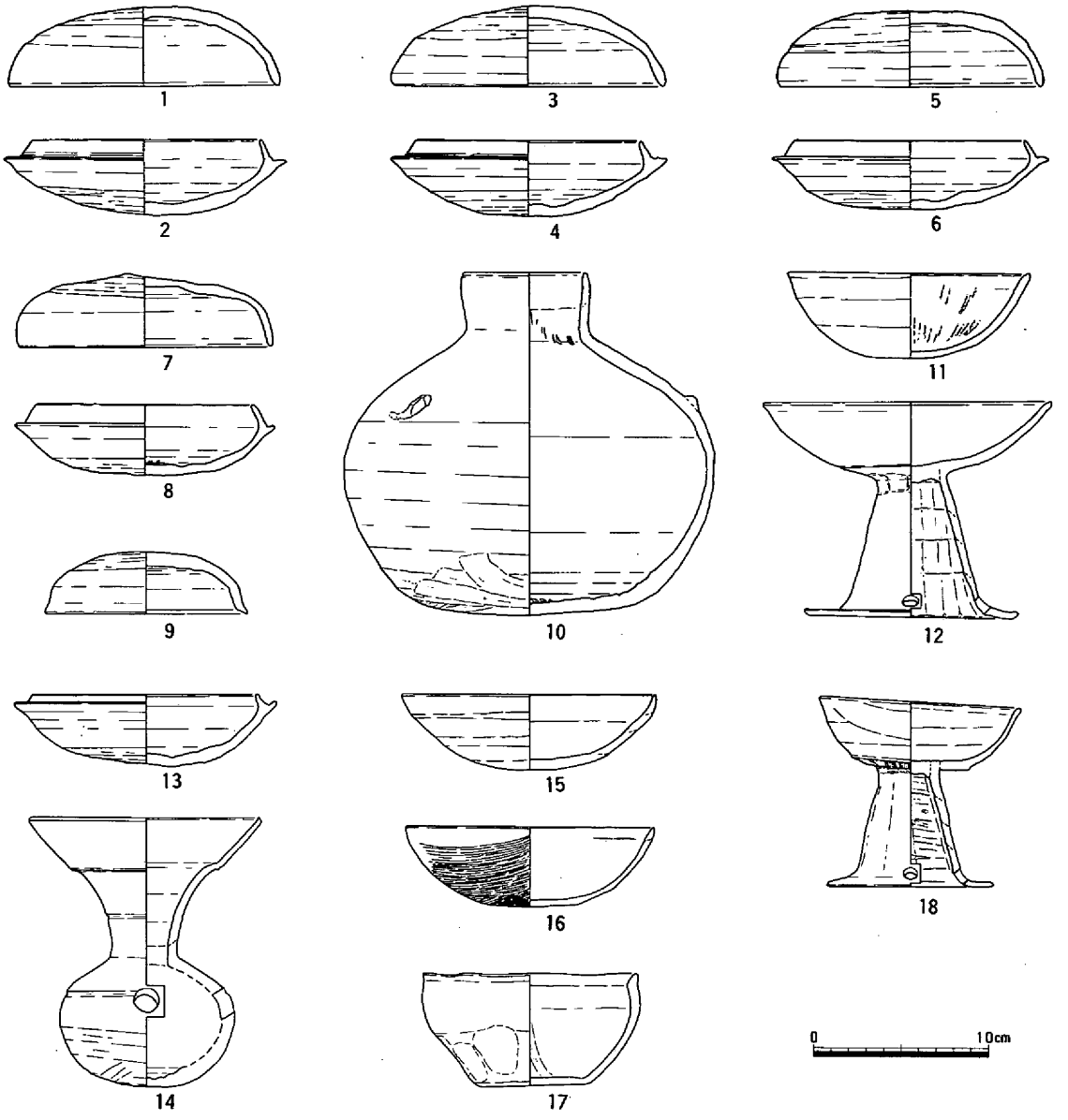
断面図の箇所で述べたが、石室の崩壊度に比べ堆積土は比較的残存度が高い。そのため遺物は築造当時に近い形で残されていたと考えられる。出土遺物には須恵器・土師器、鏃や斧・鋤先などの鉄製品や耳環などがある。出土状態をみると、**18**から奥壁近くの置石まで180cm×50cmほどの空間がある。**3**の土器は床面より少し浮いた状態で出土しており、これを除くと人体が入るスペースになる。この空間の周りには土器や鉄製品をおいている。これらの土器は、**18**より西側におかれる土器より若干古い型式になる。須恵器は杯身と杯蓋が、**9**の小さめの杯蓋を抜かし、完全に４セットになる。鉄製品中鉄鏃は、**M19**以外全てがこの空間の周りに付随する。また鏃身部に孔の開いたもの**M８・９**は、土師器の椀の上におかれ、他のものとは区別される。また斧や鋤先などの農工具も、**M39**の鋤先をこの空間のものと判断すれば全てが入る。刀子は**M35**の１本しかない。**18**より西側になる１群は、須恵器が２個体、土師器が４個体で土師器の比率が増す。須恵器の杯身**13**とセットになる蓋は存在しないが、土師器**15**の法量は**13**と一致し、伏せた状態で出土していることから、蓋に転用した可能性もある。鉄製品は３点中２点が刀子であり、刀子の割合が増す。また耳環も２点近似して出土している。奥壁側にあったような人体の入るスペースは存在しない。

このように主体部は、須恵器の比率が高く鉄鏃や農工具を伴う奥壁側と、土師器の比率が高く耳環や刀子を伴う西側、の２つに分かれる。供伴土器に若干の時期差があることから、最低１回は追葬されたものと思われる。

出土遺物（第26・27・28・29図）

・須恵器・土師器（第26図）

須恵器〈奥〉　杯身と杯蓋は出土状態や法量から、**1**と**2**、**3**と**4**、**5**と**6**、**7**と**8**の４セットが確認された。どのセットも、杯蓋の口径は15cm前後、杯身の口径は13cm前後で最大径は15.5cmになる。蓋の天井と身の底部外面には、左回りのヘラケズリがある。内面には仕上げナデをする。**9**は杯蓋であるが、他のものに比べ口径が11.4cmと小型になる。作りもしっかりしている。**10**は直行壺である。胴部最大径はやや上方になり、肩部付近まで自然釉がある。また肩部には他の須恵器の破片が残る。



第26図　段林古墳出土遺物〈須恵器・土師器〉（１/４）

底部外面には右方向のヘラケズリがあり、内面には同心円状のあて具痕が残る。

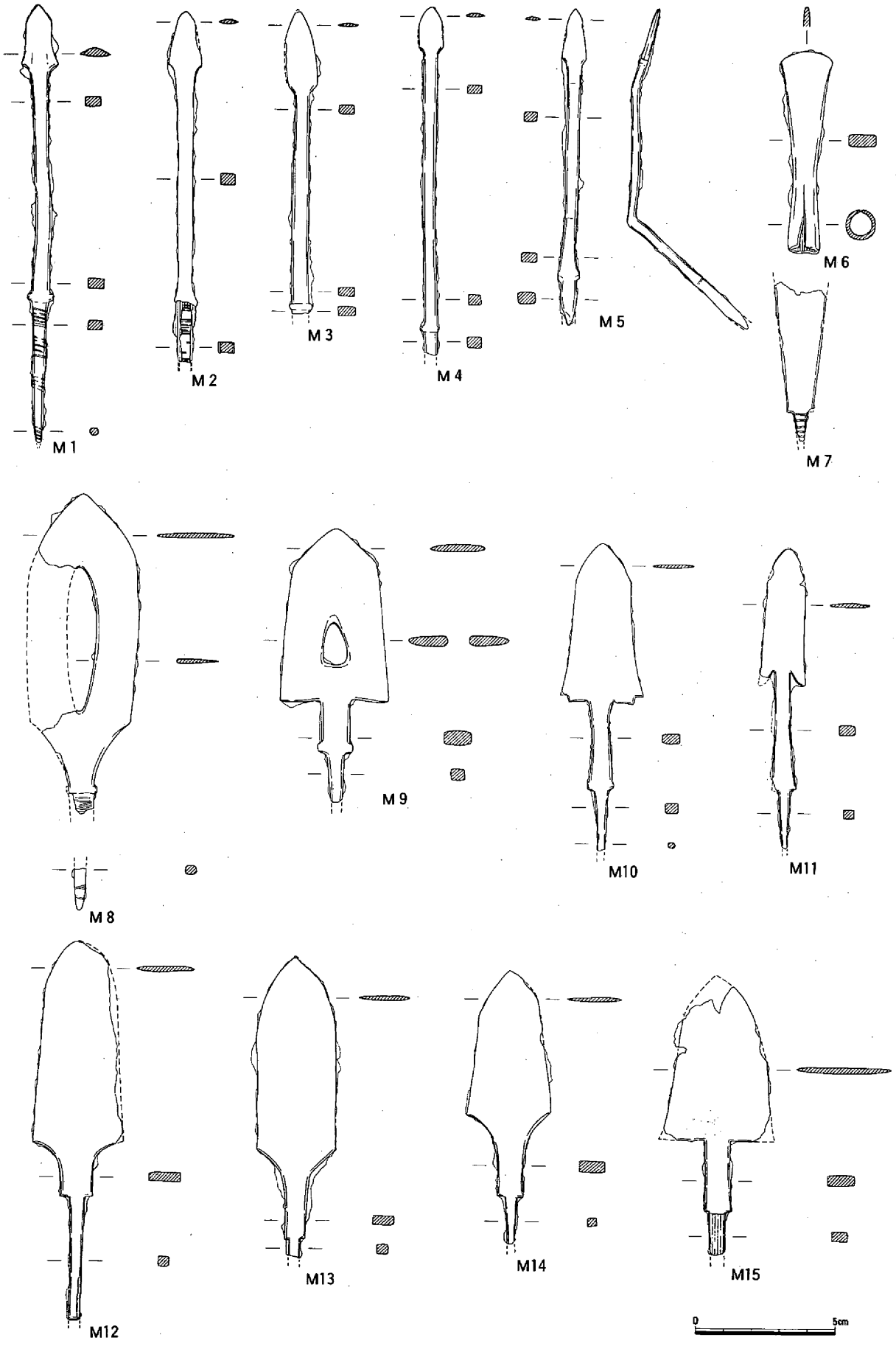
土師器〈奥〉　**11**は椀であり、体部が丸く深い。内面に暗文がある。**11**の上から鏃身部に孔の開いた鉄鏃**Ｍ８**や**Ｍ９**が出土する。**12**は高杯であり、杯の部分が大きく、比較的浅い。

須恵器〈西〉　**13**は杯身であり、口縁部と蓋受部の高低差が縮まる。口径12.7cm、最大径14.7cmで法量的には奥壁部のものとあまり差はないが、形態的に新相である。**14**は瓶であり、頸部と体部に１条の凹線文がある。体部下半には左方向のヘラケズリがある。

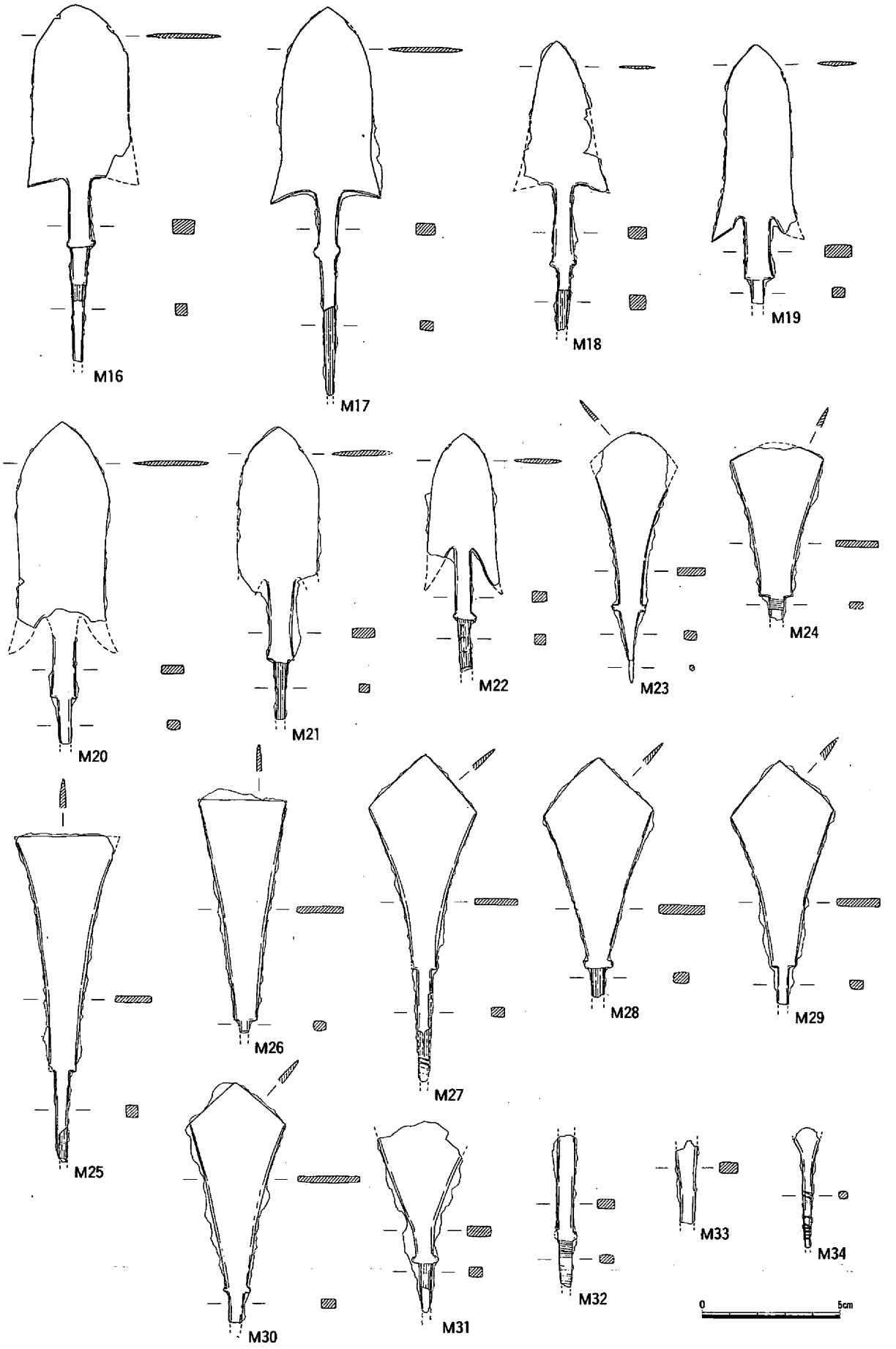
土師器〈西〉　**15**～**17**は椀であり、**15**･**16**は身の部分が浅くなる。**15**は蓋に転用された可能性がある。**17**は外面に指頭圧痕が残る。**18**は高杯で、**12**に比べて小型で身は小さくやや深い。

・鉄製品（図27・28・29図）

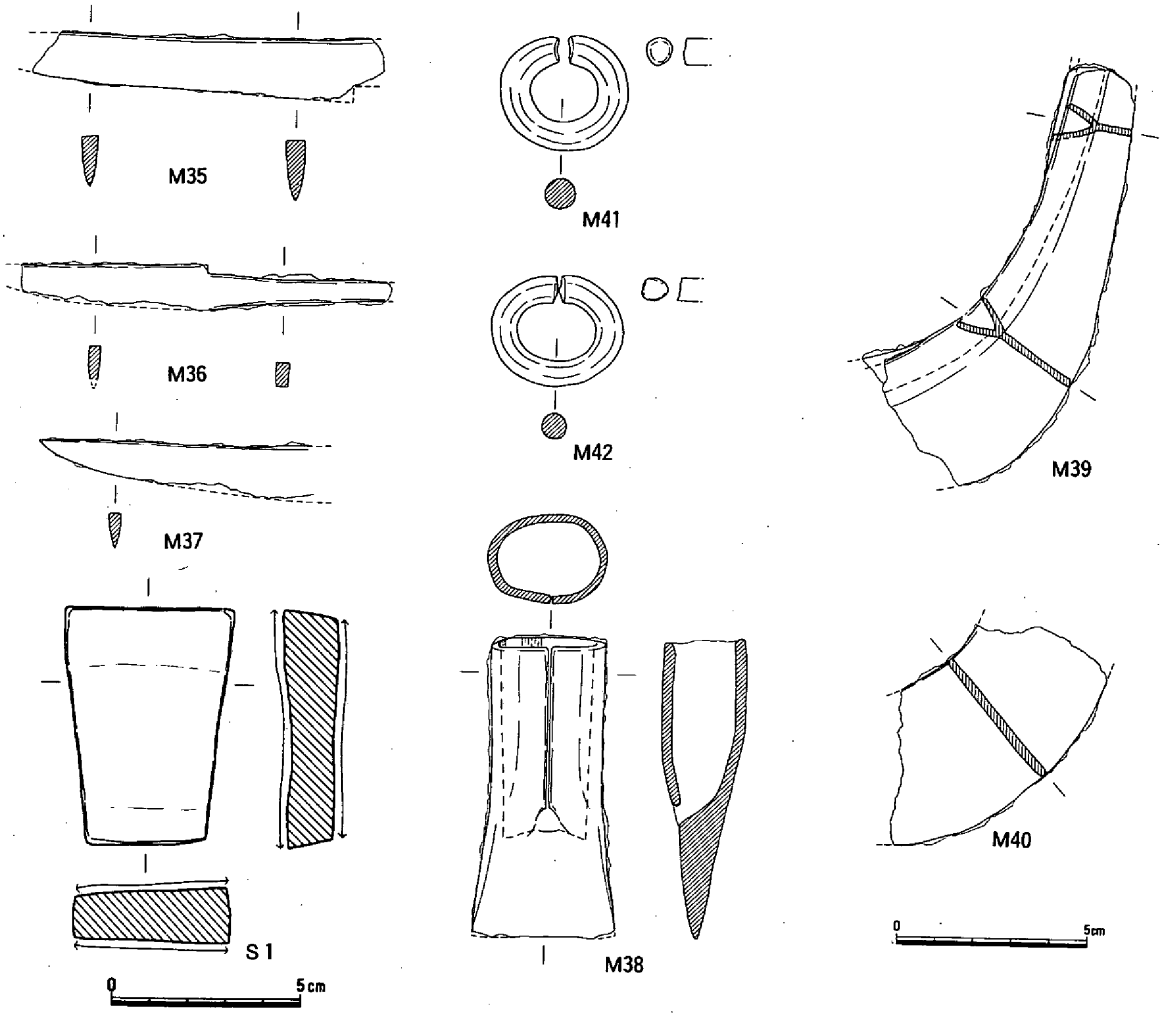
鉄鏃（第27・28図）　**Ｍ１**～**Ｍ５**は、長頸式柳葉式鉄鏃である。**Ｍ１**には鏃身部にわずかに鎬が残る。**Ｍ１**～**Ｍ４**には箆被関部に棘状突起を有する。**Ｍ５**は頸部を意図的に折り曲げる。**Ｍ６**は有袋鉄鏃である。やや扇形に広がり、先端部を丸く収める。**Ｍ７**は扇形に広がる部分が、**Ｍ６**に近似する。**Ｍ８**



第27図　段林古墳出土遺物〈鉄器１〉（１/２）



第28図　段林古墳出土遺物〈鉄器２〉（１/２）



第29図　段林古墳出土遺物〈鉄器３・石器〉

～M31までは、有茎平根式になる。Ｍ８は柳葉式である。今回出土の鉄鏃の中で最も大型になり、鏃身部には透かし孔がある。Ｍ９は長三角形式の刃部が張った形である。鏃身部には透かし孔がある。Ｍ８・９とも箆被関部に棘状突起を有する。M10は長三角形式で、逆刺部に段をもつ。箆被関部に棘状突起を有する。M11は腸抉柳葉式である。鏃身部が狭くなり、関部はやや広がる。M12～M14は柳葉式である。それぞれ形が違い、鏃身部が長いものほど頸部が短く、鏃身部が短いものほど頸部が長い。M15は長三角形式である。M16～22は、腸抉柳葉式である。M16～18･22の箆被関部には棘状突起があり、M19～21は関部がやや広がるタイプである。M16～18は逆刺部が浅く、M19～22は深くなる。M19は逆刺部がさらに内側へ入り込む。M19は鉄鏃の中で唯一西側部の出土である。M23･24は鏃身部が扇状に広がり、刃部が丸く収まる。M23の関部には棘状突起がある。M25･26は方頭式である。M25は鏃身部が刃部に近づくにつれて外反する。M27～30は圭頭式である。M28･30は、関部に棘状突起を有する。M31は圭頭式になるか刃部が丸く収まるかは不明である。M32･33は長頸式になり、M34は平根式になる。

刀子（第29図）　M35は刀身部であり、奥壁部の出土である。M36は刀身部と茎部であり、やや細身になる。M37は刀身部である。両者とも西側部出土である。

鉄斧（第29図）　M38は、有袋鉄斧である。袋部は丸く収まり、合わせ目は隙間がない。刃部は先端に向かってやや広がるが、袋部の幅とあまり差はない。刃部の断面形態は、先端に向かって尖る。

鋤先（第29図）　**M39･40**は鋤先である。両者とも刃先部が半円形を呈する。**M39**は、刃部の比率が耳部の比率より大きくなる。**M40**は耳部は残らないが、**M39**同様に刃部の比率が大きくなると思われる。復元すれば、**M39**より大きくなるであろう。

鉄滓（図版５－２）　鉄滓は表面に布地が張り付いた状態で出土した。

・**耳環**（第29図）　**M41**は鉄地金胴貼の耳環である。**M42**は鉛製である。**M41**は青銅色であり、**M42**は白色である。切れ目幅は**M41**が0.4cmで、**M42**が0.2cmである。厚さはそれぞれ0.8cmと0.6cmになり、どちらも精細さを欠く。

・**石製品**（第29図）　Ｓ１は、砥石である。流紋岩製である。

出土遺物の年代は、奥壁側は特に須恵器が田辺編年でＴＫ43になり、６世紀第４四半期になる。西側の須恵器や土師器は奥壁側よりやや新相になり、若干の時期差があるものと考えられる。追葬が１回以上行われたことは確実である。（小林）

第１表　古墳出土鉄製品観察表　　（　）内は推定、もしくは現存値

番号	遺構名	器種	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	備考
M１	古墳石室	鏃	(155)	13	3	13.99	糸巻き痕
M２	古墳石室	鏃	(124)	12	2	12.57	木質　糸巻き痕
M３	古墳石室	鏃	(108)	12	1.5	9.68	
M４	古墳石室	鏃	(124)	9	1.5	9.03	
M５	古墳石室	鏃		9	1.2	8.86	頸部で屈曲
M６	古墳石室	鏃	70	18.5	2	13.29	袋状になる
M７	古墳石室	鏃					糸巻き痕
M８	古墳石室	鏃	(115)	(40)	2	27.72	鏃身部に孔有り　糸巻き痕
M９	古墳石室	鏃	(98)	39	4	26.17	鏃身部に孔有り
M10	古墳石室	鏃	(111)	30	1.5	11.84	木質
M11	古墳石室	鏃	(107)	16	2	8.92	
M12	古墳石室	鏃	(135)	32	2	25.15	木質
M13	古墳石室	鏃	(108)	28	2	24.27	
M14	古墳石室	鏃	(98)	30	2	20.56	糸巻き痕
M15	古墳石室	鏃	(96)	(40)	2	21.21	木質
M16	古墳石室	鏃	(129)	(38)	2	25.35	木質
M17	古墳石室	鏃	(140)	39	2	30.15	木質
M18	古墳石室	鏃	(103)	(34)	1	13.83	木質
M19	古墳石室	鏃	(93)	(30)	1.5	16.39	
M20	古墳石室	鏃			2	20.63	
M21	古墳石室	鏃	(106)		2	20.74	木質
M22	古墳石室	鏃	(86)		2	11.35	木質　糸巻き痕
M23	古墳石室	鏃	90		1	11.33	
M24	古墳石室	鏃	(63)	34	2	14.02	糸巻き痕
M25	古墳石室	鏃	(118)		2	22.95	
M26	古墳石室	鏃	(85)	32	2	14.03	
M27	古墳石室	鏃	(117)	39	2	21.42	木質　糸巻き痕
M28	古墳石室	鏃	(87)	39	2	20.10	木質
M29	古墳石室	鏃	(88)	37	2.5	16.44	
M30	古墳石室	鏃	(87)	34	2	15.34	
M31	古墳石室	鏃				12.54	木質
M32	古墳石室	鏃					糸巻き痕
M33	古墳石室	鏃					
M34	古墳石室	鏃					糸巻き痕
M35	古墳石室	刀子		16	5	18.84	刀部のみ
M36	古墳石室	刀子		12	3	10.70	
M37	古墳石室	刀子		14	3	5.58	刃部のみ
M38	古墳石室	斧	79	38	22	138.06	
M39	古墳石室	鋤			2	48.59	
M40	古墳石室	鋤			2	20.55	
M41	古墳石室	耳環	33	31	7	29.20	
M42	古墳石室	耳環	34	29	6.5	27.28	

第4章　ま　と　め

弥生時代

調査区内の西側は、現地表から10～20cm下に地山が現れる。地山まで掘り下げても遺構は何1つ検出されない状態である。つまり弥生時代当時から、遺跡はこれ以上西側には拡がらないことがわかる。一方調査区の北東側は、数回にわたる土砂崩れによって大半が壊されている。よって本来遺跡は調査区の北東側へ伸びていたと思われるが、現存しない状態である。本来の遺跡の規模は不明であるが、遺跡の最西端のみが残存したことになる。

次に遺跡の時期であるが、出土遺物のほとんどが弥・中・Ⅱ期と弥・後・Ⅲ期になる。竪穴住居や遺物を出土する土壙などの主要な遺構は、弥・中・Ⅱ期の遺物が覆土の上層から出土する。この状況から考えて本遺跡は弥・後・Ⅲ期の集落跡であり、弥・中・Ⅱ期の遺物が土砂崩れによってまぎれ込んだものと思われる。集落跡といっても残存する竪穴住居は1軒のみである。当時の集落の規模は不明であるが、本調査区の位置が山腹部であることから、拠点集落のような大規模なものにはならないと考えられる。残存した1軒の竪穴住居は、火災の跡を示す炭化層がある。この炭化層は住居の一部分のみに存在し、全面には行き渡っていない。きわめて規模の小さい火災の跡だといえよう。また遺物の出土状態は、床面直のものがほとんどなく、破片ばかりで完形品がない。この状況からこの竪穴住居は、廃棄された住居であるといえよう。

これら弥・後・Ⅲ期の下の層から、土壙3基と炉跡2基が検出されている。出土遺物がないため確実な時期は不明だが、本遺跡中、弥生時代の層が2面あったことは確実である。

弥・中・Ⅱ期の遺物のほとんどが土砂崩れによるものと先述したが、たまりや古墳時代以降の土砂崩れ跡、中世の土砂崩れ跡などに中・Ⅱ期の遺物が増えることはその証拠になる。弥・中・Ⅱ期の分銅形土製品2個体も、これら土砂崩れ跡からの出土である。これら土砂崩れ跡の上流に当たる東側や南東側には、かなり大規模な中・Ⅱ期の遺跡があったものと思われる。特に鴨方町の山間部には中・Ⅲ期の遺物の発見が多いことなどから、まだ発見されていない遺跡の存在を伺わせる。また土砂崩れ跡の遺物には、特殊壺の可能性をもつものも含まれる（**102・133**）。胴部がなく突帯の有無は不明であるが、特殊壺であった場合向木見型の範疇となる。これらが特殊壺であった場合、本遺跡の南東側には中・Ⅱ期の遺跡ばかりでなく、終末期の墳丘墓があったことも考えられる。つまり南東側は、本遺跡以上に弥生時代遺跡の密集地である。

古墳時代

古墳時代の遺構は段林古墳の1基のみ存在する。古墳時代以降の土砂崩れによってその大半が破壊されているが、奥壁幅1.1m×側壁長4mの横穴式石室を内部主体とする古墳であることが判明した。石室は無袖型になり、墳形と規模は削平されていいるため確実ではないが、8～9m前後の円墳になると思われる。また古墳の下側には石材が点在していて、これは石室に使われていた石材が流れ出したものだと思われる。石室の石材は先述したが、奥壁と奥壁に接する1つ目の側壁のみ大型の石材を使用している。他の側壁の石は1段目であるにも関わらず、高さ20～30cm、幅40～50cm前後の小型の石材を使用している。使用されている石材はそれほど均整がとれていないが、石室内側に面する箇所のみ平らな面を使用している。石室から流れ出したと思われる石材も均整はとれてなく、大きさも20

～30×40～50cm前後である。これらの石材は、現地産の花崗岩が使用される。

この石室の特徴は、鴨方町内の他の古墳と多くの類似性がある。鴨方町内には大小数多くの古墳が存在するが、その内横穴式石室を内部主体に持ち全貌がわかる古墳は、片山2号墳、宮ノ脇古墳、阿坂古墳の3基である。その内片山2号墳はやはりかなりの破壊を受けているが、幅1m×側壁長2.4mの無袖型の横穴式石室である。側壁の石材は1段目でも20～30×40～50cm程度の小型のものである。またそれぞれの石は均整がとれいないが、内側に接する面のみ平らな面を使用している。奥壁の状態は不明であるが、側壁の状態は段林古墳とかなりの類似性を見せる。使用された石材も花崗岩である。遺物は出土しないが、石室の形状から段林古墳と差のない構築時期が考えられる。宮ノ脇古墳は石材の大半が失われているが、掘り方によって形状が把握できる。それによると奥壁幅1.8m×側壁長5.4mの無袖型の横穴式石室である。掘り方は、奥壁部とそれに近接する側壁部が特に深く掘られている。おそらくこの部分のみ大型の石材を使用していたものと思われ、段林古墳の石材使用方法と同じになる。ただし段林古墳は奥壁のみに掘り方が存在したが、宮ノ脇古墳の場合側壁部分にも存在し、完全には一致しない。使用された石材は、付近に点在する石材から判断して、現地産の花崗岩が使用されたものと思われる。古墳の築造年代は6世紀第4四半期～7世紀第1四半期になり、段林古墳とほぼ一致する。阿坂古墳は横穴式石室の天井石が残ってはいないものの、基底部は全て残っている。すなわち奥壁長1.3m×側壁長7.7mの無袖型の横穴式石室で、やはり奥壁と側壁でも奥壁に接する部分に大型の石材を使用している。ただし側壁部の大型の石材は、右側で4石、左側では2石まで使用される。それ以降は入口部付近に向かって小型の石材を不揃いに並べる。内側に接する面のみは平らな面を使用している。石室入口部付近の小型の石材は50～80cmになり、段林古墳の使用石材よりやや大きくなる。奥壁に近接する側壁の大型の石材が増えることや、入口部分の小型の石材が段林古墳よりやや大型になることは、石室の全長に起因しているのであり構造自体は類似する。使用される石材も現地産の花崗岩である。出土遺物から7世紀代の構築が予想され、段林古墳よりやや後出する。上記をまとめると、段林古墳と宮ノ脇古墳は石室の構築年代と方法、石材において共通性がある。片山2号墳は、石室の構築方法において共通性がある。出土遺物がないため構築年代は不明だが、段林古墳とそれほど開きがないものと思われる。阿坂古墳は構築年代が後出する。古墳の規模の増加のため石室も大型化し、そのため石材の大きさと配列に多少の差違を見せるが、基本的な構造は変わらない。

また段林古墳の副葬品には、鉄製品が多く含まれる。その中でも鉄鏃は多量に出土し、長頸式7本・平根式27本の計34本を数える。これは石室長1.1m×4.0mの規模の古墳にしてはかなり多い数である。長頸式より平根式の数が多くなるのは、県南西部の特徴に即している[(1)]。その他に斧1点、鋤2点などもある。特に斧は、それほど多くはないが県南西部での出土例が伝えられている。ただし鋤は、県南西部での出土例が数少ない[(2)]。鉄滓の副葬例も県南西部に多い。

以上のように段林古墳は、石室の構造と石材・副葬品の特徴などからきわめて在地性の強い古墳であるといえる。段林古墳は近接する塚地古墳と共に、鴨方町から矢掛町に抜ける遙照山ルートの要にある訳で、その位置的役割は築造当時からきわめて重要であったと思われる。　　(小林)

註

(1) 尾上元規「古墳時代後期における鉄鏃の地域性形成について」『古代吉備』第17集　1995年

(2) 亀山行雄「岡山県内の横穴式石室」－考古学研究会岡山例会から－『考古学研究』第44巻第2号　1997年

1．土壙－3遺物出土
状況（西から）

2．段林古墳全景
（北西から）

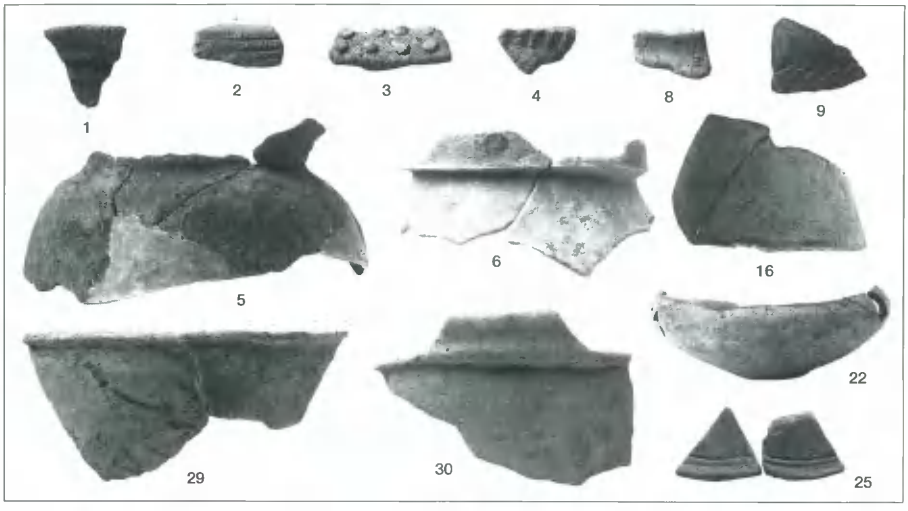
3．石室内遺物出土
状況（北から）

図版 2

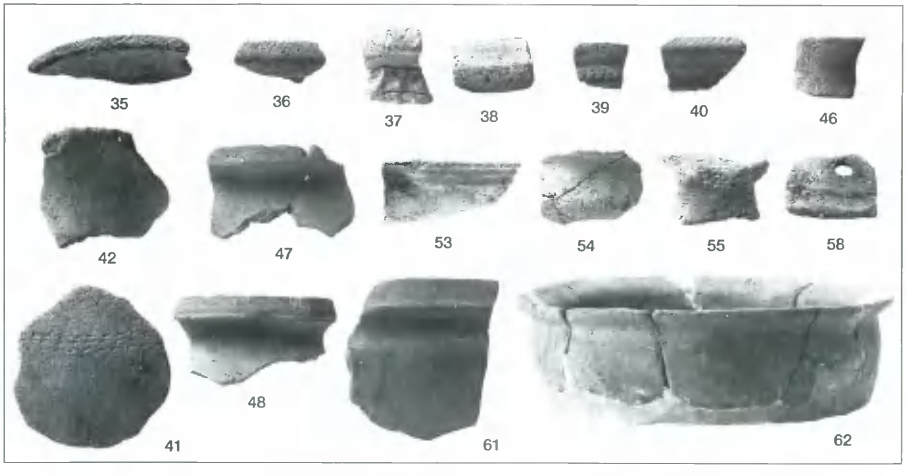
1．石室内鉄鏃出土
状況（北西から）

2．中世以降土砂崩れ
跡（北西から）

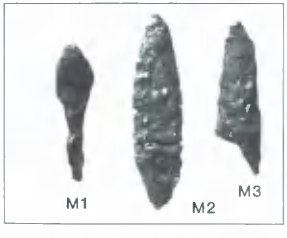
3．段林遺跡全景
（北西から）



1．竪穴住居出土主要遺物（1/3）

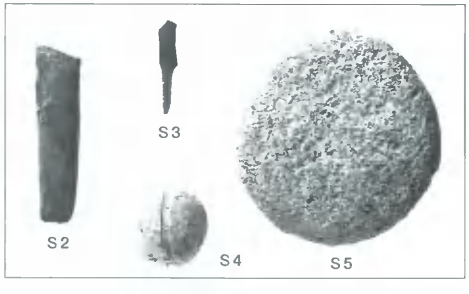


2．たまり出土主要遺物（1/3）



3．竪穴住居出土鉄鎌（1/2）

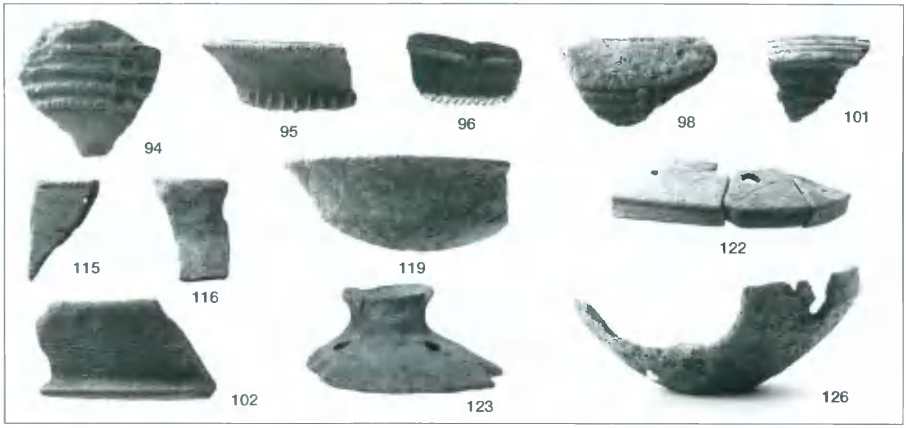
4．たまり出土紡錘車（1/2）



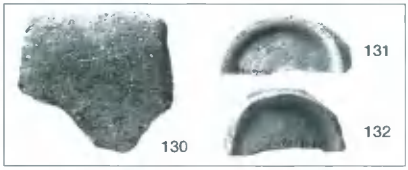
5．たまり出土石器（1/3）

図版 4

1．古墳時代以降土砂崩れ跡出土主要遺物（1/3）

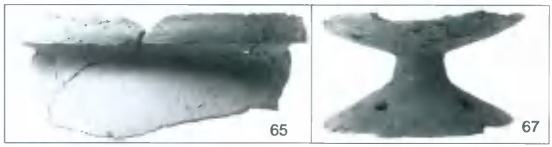


2．中世土砂崩れ跡出土主要遺物（1/3）



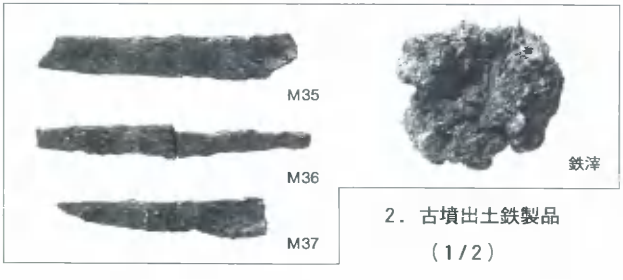
3．土砂崩れ出土土器〈弥生以外〉（1/3）

4．調査区西側（1/3）



5．土壙－3出土遺物（1/3）

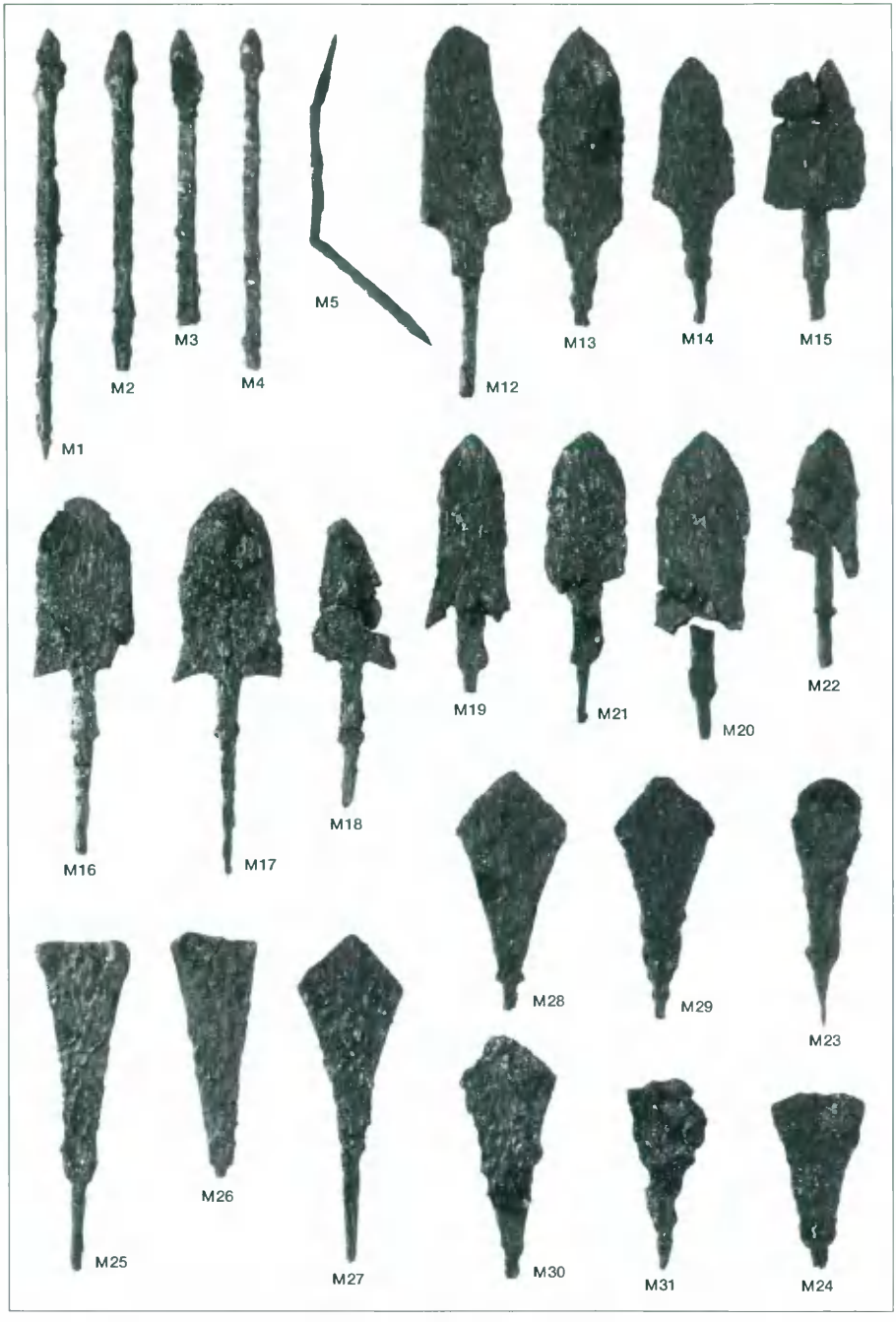
1. 古墳出土土器（1/4）



2. 古墳出土鉄製品（1/2）

3. 古墳出土砥石（1/2）

図版 6



古墳出土鉄鏃（1/2）

報告書抄録

ふりがな	だんばやしいせき・だんばやしこふん
書名	段林遺跡・段林古墳
副書名	県道矢掛寄島線改良事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	１３２
編集者名	小林利晴　内藤善史
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701－0136　岡山県岡山市西花尻1325－３　TEL 086－293－3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700－8570　岡山県岡山市内山下２－４－６　TEL 086－224－2111
発行年月日	1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だんばやしいせき 段林遺跡	おかやまけん 岡山県 あさくちぐん 浅口郡	33		34° 33′ 50″	133° 36′ 30″	1996.07.16 ～ 1996.08.02	700cm	県道矢掛寄島線改良事業に伴う発掘調査
だんばやしこふん 段林古墳	かもがたちょう 鴨方町 じとうかみ 地頭上	443				1997 .07.08 ～ 1997.09.11		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
段林遺跡	集落址	弥生時代	竪穴住居１ 土壙６ 炉跡２	弥生土器　石器 分銅形土製品 玉類	鴨方町初の分銅形土製品
段林古墳	古墳	古墳時代	古墳１	須恵器・土師器 鉄製品　鉄滓	６世紀後半の横穴式石室 豊富な鉄製品

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告132

段林遺跡・段林古墳

県道矢掛寄島線改良事業に伴う発掘調査

1998年３月27日　印刷
1998年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印　刷　サンコー印刷株式会社